
混沌の霸王

haroeris

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混沌の霸王

【コード】

N5293Q

【作者名】

haroeris

【あらすじ】

高橋透（男）は気がついたら以前にプレイしていたMMORPG”混沌の霸王”で使用していたキャラクタ・エルシア（女）になっていた。TS要素がありますが現在のところそれが活かされていません。そのうち活かしたいと思います。最強系ですのでそれらが嫌いな方はブラウザバックをお願いします。

また誤字脱字、文章の修正等あればお教えいただけると幸いです。出来る限り反映させていただきます。

第1話 始まり

はじまりの街ミール。

すべての冒険者がここから冒険を始めることから付いた名前だ。

かつては死者の群れに襲われ壊滅状態に追い込まれたものの、今ではかつての盛況を取り戻している。

しかしその名残は地下墓地に残され、今はそこから魔物たちが出てこないように封印がされている状態となっている。

冒険者たちは幾階層とも知れぬその地下墓地から冒険を始め世界へと旅立っていく。

地下墓地がどこまであるのかは分かっていないが、地下3階から明らかに敵が強くなるため、それ以下には潜らないのが冒険者の決まりごとになっていた。

そして魔物が出るのはミールだけではなく他の街近くでも出現するため、冒険者たちはある程度まで地下墓地で修行すると各地へと旅立っていくのが常だった。

その街の南東にある宿屋の一室。

そこにひとりの女性が寝ていた。

部屋には紫色の甲冑・ラビリンスメイル・が飾られていた。

ラビリンスメイルは女性戦士のみに着ることが許される鎧だ。しかもかなりの重さがありとてつもない上級者しか着ることができないとされる。

ただ所持することは誰でもできるためその格好良さから購入するものもいるためその女性が戦士であるとは限らない。

だがかなり汚れ、傷ついていることから実際に使用しているのではないかと考えられる。

その部屋の中でその女性が目を覚ました。

「なんだこれは……………」

それが女性の第一声だった。

女性は紫色の髪、高い声、メリハリのある肉体、その全てに対して驚いていた。

それもそのはず、その女性の元の名は高橋透という男性だったからだ。

日本人であり、大学生。

夜にはネットゲームに興ずる一般的とは言えないかも知れないが、普通の男だったからだ。

透は体をまさぐり、それが明らかに女性の体だと知ると部屋にある姿見で自分の姿を写見た。

「エルシア…………？」

それは透がネットゲームで使っていたキャラクターの一つだった。

透はネットゲームでキャラクターを作る際に男性と女性の二つのキャラクターを作るようにしていた。

男性の魔法使い系と女性の戦士系。

男性にしか装備できないアイテムや女性しか装備できない服装などがあるため両方作るようにしていた。そうすることでどちらでも対応できる。

透はそのキャラクターの一つ「エルシア」になっていた。

「嘘だろ？こんなことありえない」

そう言いつつ周りを見渡す。

その目にラビリンスマイルが映り、ここがネットゲーム「混沌の霸王」だと悟る。

しかしそれを簡単に受け入れるまでには至らない。

それは当然のことだ。

家で寝ていて、起きたらネットゲームの中にいたなんて小説などでしかありえない話だからだ。

透は後ろずさり、尻餅をつく。

頭を両手で抱え「嘘だ……嘘だ……」と繰り返す。

その声をもとの太く低い声ではなく、可愛い高い声であることがさらに透を混乱させる。

小一時間もその混乱が続いたが、コンコンと扉を叩く音で我に帰った。

「お客さん、朝ですよ。そろそろ起きていただかないと」

若い女性の声だった。

「はい……」

透はそう答え、ラビリンスマイルを手に取りアイテムボックスに仕舞い込んだ。

無意識の行動だった。

ゲームではアイテム枠と力の許す限りアイテムを所持することができる。

ラビリンスメールは透にとって十分軽く、一枠ですむ鎧だった。

扉を開け宿屋の女将に謝りつつ階下に降りる。

「食事はどうするね？」

「頂きます……」

未だ混乱する頭を抱えつつもなんとか受け答える。

ここは「混沌の霸王」。

それは間違いない……透は考えていた。

いくつかオンラインゲームには手を出したが、あんなに特徴ある形のラビリンスメールは「混沌の霸王」しかない。

やがて食事が運ばれてきて、それを上の空で食べながら思考の渦に入っていく。

(なぜ俺はここにいるんだ?)

それだけの事柄が何度も何度も繰り返される。

「もう少し味わって食べてくれないもんかね」

透は女将の声でまた我に振り返り思考の渦をとりあえずは後回しにして食事をすることにした。

(今は考えても仕方がない。食事のあとで調べてみよう)

出された食事はパンとスープにサラダ、それだけのものだったがかなり美味しかった。

ゲームではアイテムの味など関係ないものだったが、今のエルシアにはそれが現実のものだと認識させるには十分だった。

女将は食事を終えたことを確認すると、透のテーブルを片付け始める。

「すみません、ここはどこですか？」

片付けている女将に透はそう尋ねる。

「なにいつてんだい。ミールに決まってるだろう？」

「そうでしたね、ちょっと寝起きが悪いもので……つい……」

そう言って透はごまかした。

ミール。

「混沌の霸王」で作ったキャラクターが最初に訪れる街。

街の中には地下墓地があり、時タイイベントとして死者の群れが襲ってくる街だったはずだと思いつく。

透も最初はここから始め、各地をめぐる記憶がある。

そして最後にログアウトしたのがこの街だった。

(とりあえず街を回ってみるか……何かわかるかも知れない)

「女将さん、勘定をお願いします」

「あいよ、宿賃も含めて銀貨1枚だね」

透は懐を探るが、金貨しか見当たらない。

ベータ版だった頃は確か銀貨も敵が落としていたがそれ以降は金貨しか落としていなかった。なので金貨しか持っていなかった。

「これでもいいですか？」

と透は金貨を数枚取り出した。

「そんなにいらないよ」

笑いながら女将さんは透の手から金貨を一枚取ると、銀貨を9枚渡してきた。

金貨1枚 銀貨10枚だと透は理解する。

透は勘定を済ませると宿の外に出た。

しかしでたところで行く宛はない。

ゲームと同じならば狩りの場所はいろいろ覚えているが、まずは現状の確認が必要だった。

女性の体になっていることで体の確認をと思ったところで、透の目の前に見覚えのあるステータスが表示された。

レベルやSTR（力）などが表示されている。

レベルはMaxの99……。

アイテム、と考えたところでアイテム画面が表示される。

その中には何も考えずに仕舞ったラビリンスメイルもあった。それどころか戦士の最後に手に入れるソウルメイルもあった。

それは間違いなく自分が作ったエルシアのキャラクタステータスであり、キャラクタが持っていたアイテムだった。

フルポーションも53個。

それ以外に転移スクロールがいくつか。

スキルを思い浮かべるとスキル欄も表示される。

完全な戦士として育てたため、戦士系のスキルがすべて揃い、熟練度もMaxになっていた。

このゲームでは一度の転職と一度の昇格ができるようになっていく。

転職では戦士から魔法使い、僧侶から盗賊など完全に別の職業に転職できるようになっている。別の職業に転職した場合には以前のスキルは熟練度に制限が付き完全には使いこなせない仕様となっていた。

しかし戦士から戦士というような同じ職業へという選択も認められており、その場合には転職ではなく上級化となり専門スキルが新しく追加されることになっている。

昇格は最後の職業をさらに昇華させたものであり、初期ステータスが最初から高いものとなっている。またスキルがさらに一つ追加され、専用の武器と防具が神から与えられる。

転職（上級化）にせよ昇格にせよ再び1レベルから始めることとなるため結構大変といえば大変な作業であった。

透のキャラクタであるエルシアは戦士から戦士へ上級化し、さら

に昇格も済ませている。

その証の一つがソウルメールだった。

ただ透自身がラビリンスメールの形が好きだったため最前線での戦い以外ではラビリンスメールを使用していた。

紫の髪の色に合わせた紫のラビリンスメール。胸の中央に緑色の宝石がついたそれは装備後のエルシアを引き立たせていたため、エルシアはその姿で結構目立っていた。

そしてさらに重要なのがステータス欄。

「混沌の霸王」ではステータスはSTR（力）、INT（知識）、WIS（知恵）、CON（耐久）、DEX（敏捷）の5種があり、レベルが1上がるごとに2の数値を割り振ることができる。

最初のキャラクタ作成時には全てが3の状態から始まり、スキルを覚えるために色々と割り振っていく。昇格を済ませた場合には全てが5の状態からとなる。

エルシアは戦士から戦士へと上級化し、全てのスキルを覚えていたため昇格の際には攻撃力を上げるために全てをSTRに割り振っていた。すなわちMaxである201となっていたのである。

Maxレベルが99なので98回の割り振り+5。それがエルシアであった。

昇格後も神に経験値とお金を捧げることでHPやMPをほぼ無限に増やすことができる。その結果出来上がったのが上級魔法にすら耐えうるキャラクタ「エルシア」であった。

とは言ってもそのゲーム内では最強でもなくそんなキャラクタがごろごろしていたため廃人仕様とは程遠い。

キャラクタの操作に関しては一流どころに名を連ねていたが、廃

人達は半年もたたずにそんなキャラクターを作り上げるところを透は2年以上かけて作り上げただけだったりする。

透は自分自身がそのエルシアになっていることを実感してしまい、目の前が暗くなるような気がしてきた。

倉庫用のキャラクタではなかったただけかもしれませんが……。

それ以前になぜ自分がこの世界にきてしまったのかということである。

ゲーム内ではNPCの数が少なかったように思えるが、透の目の前には多数の人が行き交っている。

その人達に聞きたいことは多数あるものの何をどう聞いたらいいのかわからない。

このようにこの世界に来た人が自分だけなのかそうでないのか。NPC出会うたはずの人が話しかけてわかるように受け答えしてくれるのかどうか。

精神的には男であるはずの自分が女の体になっていることへの葛藤。

それら全てが疑問として湧き上がり、答えが出てこない。

「どうした、嬢ちゃん。そんなところで突っ立って」

思いの外、立ったままでいた事を不思議に思った中年の男性が透に声をかけてきた。

透は一瞬、自分のことだと気づかなかったが、今の体が女だという事を思い出しそちらを振り向いた。

声をかけてきた中年男性は宿屋の近くで焼き鳥屋のようなで店を開いている人だった。

「いえ……その……」

「冒険者の初心者かい？ だったらまずはギルドに登録だね。そして最低限の装備を整えて町の東にある地下墓地へ行くといい。ただし巨大ムカデには気をつけるんだよ。あいつは危険だから、見かけたらすぐに逃げることだね」

透が口ごもっていると冒険初心者と思われたようで説明してくれる。

（ギルド？ このゲームにそんなモノがあったか？）

「ギルドってどこにあるんですか？」

透はまずそこへ行ってみることにした。
ゲームとの差異。それが手がかりのような気がしたからだ。

「ああ、ギルドはすぐその橋をわたってすぐのところにあるよ」

「ありがとうございます」

「いいって気にするな。最初は誰だってそんなもんさ。金を稼いだらうちの品物を鼻屑にしてくればありがたいってことさ」

店主に透は笑顔で礼を言う。

橋。

ゲームでは宿屋のすぐ近くに橋もなかった気がする。

だがそちらを見てみると確かに橋がある。

その向こうには竜のマークの看板が出ている建物があった。

透は再び店主に頭を下げるとそちらへと歩いて行った。

第2話 ギルド

透の今の姿はブラウスと靴のみである。

ブラウスと靴はゲームの初期段階で渡される。

防御力もないに等しい。

今の装備はその状態であった。

しかしエルシアのキャラクタがそのままならば最前線以外ではこれでも問題なかったりする。

HPが多すぎるため敵が大したダメージを当てられないうえ、自動治癒力のほうがそれを上回る。

リアル時間で20秒ごとにHPの10%が回復する。

最前線ではその回復力はあまり意味を成さないが、それ以外では十分な治癒力だった。

またSTR値も高いため攻撃力も素手でもかなりあるからモンスターを倒すのも問題ない。

透はブラウスの隙間からのぞく谷間を見ないようにしながらギルドへと向かう。

ブラジャーなどはないため一足ごとにその双丘は揺れ、擦れ、透を刺激する。

出来る限り意識しないようにしてギルドの扉をくぐった。

扉をくぐると横のほうから声をかけてくる女性がいた。

「いらっしやい、初心者の方ですね？ こちらへどうぞ」

服装が明らかに初心者だったからだろう。初心者と決めつけて案

内をしてくる。

透にとつてはゲームは初心者じゃなくてもこの世界は初心者だ。情報は多ければ多いほどいいので、その案内に従ってその女性の方へ向かう。

「ギルド登録はまだされてませんよね？」

「はい」

どのように受け答えをしていいのかわからないので単純な答えしか透は返せなかった。

「ではまず説明をさせていただきますね」

そうやって女性は自らをファーマシーと名乗りギルドの説明を始めた。

ギルドは冒険者を支援する組織で、各地域に存在する。ミール以外にノーブル、シユベル、リュシユケイオン、スミート、ロツクウツド、パツティア等々。

それらの名前は透にとつて馴染み深いものだった。

ギルドに登録するとランクが与えられ、依頼をこなしたり褒賞を与えられるようなことをすることにそのランクは上がっていく。

ランクは1から始まり、数値がそのままギルドランクになる。

レベルみたいなものと透は納得する。

依頼は討伐系や採取系など多種にわたり、それぞれランクに応じた依頼を受けることができる。自分のランクを超えた依頼を受けることも可能だが、依頼には期間が設けられておりそれを超えた場合

には失敗とみなされ罰金を取られることになる。

ランクが高いものを受ければ当然ランクの上がり方が早くなるが、失敗も多いため自分にあつたランク、もしくは複数人でパーティを組んで上のランクの依頼をこなすのが常である。

現在のギルドランク最高は11とのことだった。

(レベル11ということだろうか?)

ギルドに登録するとギルドカードが渡され、それが身分証明となる。そのため一般人でもギルドカードを取得することは珍しくない。

「これでギルドの説明は終わります。登録しますか？」

最後の確認だった。

透は当然登録することを選ぶ。

「はい、お願いします」

「それではこの水晶球に手を当ててください。それで完全に個人の特定となります」

透は水晶球に手を当てた。

水晶球が軽く輝き、すぐに消える。

「これで登録が完了です。カードの発行まで1時間ほどかかりますのでお待ちください。依頼などはあそこの掲示板に書かれていますのでそれをご覧になっておかれるといいかも知れませんよ」

ファーマシーの手の先には大きな掲示板があり多数の紙が貼り付

けられていた。

「依頼を受ける場合にはあそこにある掲示板から紙を取ってきて依頼受付に持ってきてください」

ファーマシーはそう言うど何らかの書類を後ろにいる職員らしき人に渡していた。

透は言われたとおりに掲示板に向かうことにした。

掲示板はランク別に紙がはられており、それぞれに内容が書かれていた。

ランクは10までがそれぞれ個別でそれ以上がひとつにまとめられていた。

ランク1の依頼を見ると「蜘蛛の目玉の採取」「蜂の針の採取」などが書かれていた。

（たしか地下墓地の一階や森の入口付近の敵が落としていたアイテムだよなあ）

その辺りにはもはや行くことがなくなっていた透には何故か懐かしい気がしていた。

（と、さて。なぜこの文字が読めるんだ？）

透は今までに見たことがないミミズがのたくったような文字を読み理解していたことにいまさらながら気がついた。

アイテムの仕舞い方もそうだ。

自然と行っていた。

他の人もそうだろうか？

そんな疑問が湧いてくるが、周りの冒険者らしい人達を見ているだけではそれがわからない。

依頼を受けて装備を整える冒険者たちは武器をアイテム欄から取り出すようなことはしていない。少なくとも見ている限りでは。

かといって自分がアイテム欄から取り出すという行動がどういう事を招くのかわからないし、この場で着替えるわけにもいかない。

一応女なのだから。

そんなことを考えていると受付から「エルシアさん」と声がかかった。

何度かそれが繰り返されると透はそれが自分のことだとわかった。

透は慌てて受付へと向かう。

「なにかいい依頼がありました？ 熱中しているようでしたけど」

「あ、いいえ、いろんな依頼があるんだなあ、と」

透は適当にごまかした。

「そうですね、いろいろありますから自分のランクに沿った依頼を受けるといいですよ。酒場に行けばパーティを組もうとする人たちも集まっていますから、何人かで受けるのもいいかも知れません」

「はい、一度行ってみます」

「それではこれがギルドカードです」

そう言ってファーマシーはちいさなカードを手渡ししてくる。カードには金属の鎖がついていた。いわゆるドッグタグというものだろうか。

「言い方は悪いようですが、これは身分証明以外に遺体の確認にも使われますので常に首からかけておいてください」

透はドッグタグにエルシア：ランク1と書かれていることを確認すると首にかけた。

「これでエルシアさんは冒険者の仲間入りです。良き前途があなたに与えられますように」

ファーマシーはそう言って締めくくった。

「ありがとう」

透は今陥っている状況を聞こうかと迷ったが、聞き方が思いつかずに礼を言っにとどめた。

第3話 現状把握

透は冒険者ギルドを出ることにした。

次は地下墓地へ向かうか、それともさらに情報を集めるべきか。やはり情報が不可欠だろうと、RPGなどの基本である酒場へ向かうことにした。

ゲームの記憶どおりなら地下墓地の近くにあったはず。大体の道もわかる。

ゲーム通りであって欲しいという願いと、ゲームとは違って欲しいという願いが透の中で混線していた。

ゲーム通りであるなら神と合うためには危険なところへ突入しなければならぬ。今の自分ひとりでは危険なところへ突入しな

そのためにはどうしても仲間が必要になる。しかしランクがレベルと同一ならば、自分一人で行かなくてはならない。

ゲームと異なっているならば、何かの道が開けるはず。すでに違っている部分もあるのだから出来る限り違っていて欲しいとも思う。

しかし酒場はゲームの通りの場所にあった。

中に入るとゲームとは違って多数の冒険者がいることが違いだらうか。

冒険者達の服装はいろいろあるが見ている限りでは初期職業の装備にしか見えない。

ランクIIレベルの図式が透の頭に浮かぶ。

それは最悪に近い状況だ。

ゲームではレベルの違いすぎるものがパーティを組むと上のものにしか経験値が入らないようになっていた。そのためレベルが低すぎる人の手助けはなかなかできない。

お金を都合してやるか、アイテムを都合してやるかといった程度だ。

自分の持っているアイテムは低いレベル用のものは殆ど無い。

銀行に預けているものがあつたとしても、それも低レベルのものはない。

熟練の冒険者でレベルが11なのだとするとアイテムを都合したりお金を都合したりしても意味はないだろう。

所詮はその人次第なのだから。

最悪の状況を予想しながら、酒場のカウンターに座る。

「AAAをロックで」

透は普段、自分がバーに行く感覚でつい頼んでしまった。

「AAA？ なんだいそれは？」

「ああ、ウイスキーならなんでもいいよ」

酒場のマスターは棚からウイスキーを取り出し、グラスに注ぎ氷を入れて渡してくる。

銀貨1枚を要求してきたので透は素直に渡す。

ついでにもう一枚渡して情報を得ようとした。

「少し知りたいことがあるんだけど、地下墓地って何階まで制覇されてる？」

「あんた冒険初心者だね。まあ、装備を見ればわかるが。今のところ2階までだね。3階まで行ったものもいるが、すぐに帰ってきている」

最悪の想像は当たっていたかも知れない。

「ランク11を含んだパーティでも？」

「ああ、もちろんだ。ランク11が複数人で挑んでなんとか地下3階の敵を一匹倒すのが精一杯だったそうだ」

たしかゲームでもレベル11では3階はきつかったはずだ。だが複数で当たればそれほどでもなかったように記憶している。それでもやはりランク11レベルなのだろうと透は判断する。

「ありがとう」

透はグラスの中身を飲み干して酒場を出て行く。

喉が焼けるが、それが今の透には心地よい。

ある意味現実逃避をしたくなってきた。

あとは他にも同じような人がいないかどうかだけだ。

今のところ、そして少なくともこの街には現れていないようだが、他の街にはいるかも知れない。

もし自分と同じようにこの世界にきているのならば。

そしてレベルが99に達しているのならばいける場所がある。

レベル99のみが入ることの許された場所。
ロックウッドから入れる死者の町と鉾山だ。

鉾山の入り口にはモンスターがいないのでそこに集まっているかも知れない。

一縷の望みをかけて、透はそこへ向かうことにした。

ゲームではいくら食べてもお腹いっぱいにならないし、酒を飲んでも酔うことはないがすでにその二つが現実のものだと認識されている。

同じような人が同じ結論をだすとは限らない。

数日あるいは数週間、そこに籠る必要があるかも知れない。

その前に銀行へ向かいアイテムが預けてあるのかを確認する必要があることを思い出した。

銀行へ向かいながらアイテムがあるのかどうか、お金もあるのかどうかを心配してしまう。

最低限の武装は揃っているのだから無ければ無いでどうとでもなるのだが、透はそれを忘れていた。

しかしその心配はなく透が預けていたアイテムやお金はちゃんと残されていた。

銀行はそれぞれの人に小さな部屋を用意しそこにアイテムその他を預けられるようにしていた。部屋を借りるのにいくらのお金が必要となっているシステムだった。そのため銀行員がそこに何があるのかは知らない。

透にとって、それは助かることだった。

透が揃えているアイテム群はレベル11で揃えられる代物ではなかったからだ。

それを他の人に見られたならおそらく驚愕の目で見られたことだろう。

レベル99にしか入れない鉱山で手に入るアイテムなどがごろごろしている。

少なくともレベル11では手に入らないアイテムばかりだ。

それらを確認すると酒場の隣にある雑貨屋で野宿の準備を整え、ロックウッドへと向かうことにした。

町の東端から乗合馬車が出ており、それに乗り込めば各地へと行くことができる。

ゲームではそれほど時間のかからなかった移動もここでは10日ほどかかる。

途中にモンスターが現れることもあれば盗賊が出ることもある。

運良く透は便数の少ないロックウッド行きに乗合馬車にすぐに乗ることができた。

第4話 ロックウッドの鉱山

ロックウッドの街。

死者の町と鉱山がすぐ近くにある街。

死者の町には死者がうろつき、鉱山には多数のモンスターがうろつく。

かつては鉱山によって栄えた街で死者の町もロックウッドの一部だった。

鉱山にモンスターが出現し始めた頃、ロックウッドの墓場から死者が蘇り始めた。

その影響はミールにまで影響を及ぼし、死者が街を襲う大惨事となった。

いわゆる”亡者の襲来”だ。

現在では死者の町と鉱山は結界によって塞がれている。結界を破ることは誰にもできず出入りができないこととなっている。

当然のことながら鉱山からの収益もなくなり、街も大半が結界の中となったロックウッドの街は寂れていていた。

逆にそれを利用して隠者などが住むだけの、不思議な街となっていた。

ゲームでは特にそういう設定はなく、ただ単純に高レベル者向けの狩場として認識されていただけである。

透はそんな話を乗合馬車の中で聞いた。

(なるほど、そういう設定になっていたのか)

ゲームではわからないことがいろいろ分かってくる。

ランク11を超えた人の話をそれとなく聞いてみても、そんな人の話は聞いたことがないという答えが帰ってくる。ランク11が2人いるだけ。一人は戦士、一人は魔法使いとのがわかったただけだった。

(たしかに戦士は単独で狩れたし、魔法使いも初期は単独で十分狩れたはず)

結界で入れないよ、という人の言葉を適当にごまかしつつ、ロックウッドに到着した透は鉱山に向けて出発する。

鉱山入口手前に来るとたしかになにか遮るものが感じ取れる。

(いってしまえ)

透はそう意気込むと結界に向かって足を進める。

案の定、透に結界は反応しなかった。

鉱山の入り口は長いこと人が立ち入ってなかったように木々が生い茂っていた。

ゲームでは鉱山の入り口にはモンスターが出なかったため集合場所とされていたところだ。

鉱山の最下層にはドラゴンもあり、それを目当てに何度潜ったか知れない。

人の気配はない。

透はため息を吐く。

すれ違いになったのかも知れず、しばらく野宿のつもりではいたため野宿の準備を整える。

テントを張り、火を起こすための竈を作った。

近くには山からの水の流もあり、水に困ることもない。

念のため鎧をつけておこうかと考えアイテム欄からソウルメイルを取り出す。

ゲームの通りなら一瞬で装備が着け変わるがそうはならないらしい。

透はブラウスを脱ぎソウルメイルを装着していく。

装備方法は何故か頭の中に入っているようで迷いもなく装備できる。

ソウルメイルはビキニタイプの鎧だ。

これでも防御力が高いのは魔法鎧だからだ。

個人的にはあまり好きではないが、その防御力は無視できない。

見かけだけ言えばソウルメイルのほうがラビリンスメイルよりもむき出し部分が多いのだが魔法耐性なども含めてソウルメイルのほうがはるかに上だ。

それ以前に手持ちのラビリンスメイルはもつと低いレベルの装備なので強い装備は他にもあるが、金ぴかだったり透の趣味に合わないのを持ってない。

透にとって一番ありがたかったのは装備の締め付けだった。

装備をして気づいたのだが今まで気になっていた胸の揺れを気に

しなくていいことだ。

武器は体の動きを遮ることなく全身に密着するため、胸も軽く締め付けられる。

少し苦しいがそれもあまり気にならない。

次にアスカロンも取り出し装備する。

アスカロンは両手武器だ。そのため盾は装備できない巨大な金色の剣だ。

背中に背負うタイプでこれにも魔法がかかっている。

片手武器の場合には盾も装備できるが、アスカロンのほうがいろいろな効果が付いている。

アスカロンにも魔法耐性やHP+などが付加されている。

武器もアスカロン以外は初期装備の木刀しか持っていない。

ほとんどの狩場は木刀、または素手で十分だし、スキルもウィングブレードやトルネードブレードで十分対応できる。

昇格で手にれた4連続攻撃も可能となっているため透はかなり強い。

レベル11なんかではどう戦っても勝てないレベルになっていると思う。

4週間。

それが自分に課した時間だ。

その間に誰かが来ればよし、来なければここを引き払い自由に生きよう。

幸い金はあるし、生活するための実力もある、はず。

そう言い聞かせて、透は素振りやスキルの使い方を身に染み込ませていく。

ただ待っているだけではつまらないので、実力確認のために鉱山に潜ることも決めた。

テントや竈があれば、ここに人がいることがわかるだろう。

潜ると言っても表層部分だけで、多数の敵と渡り合うようなことはしない。

弱いと言ってもレベル99のみが入ることを許されたダンジョンだ。

一筋縄ではいかない。

地下1階には大した敵はいない。

いても少数なのでのんびりと狩りをするができる。

フルーシヨンのおかげといえはそれまでだが属性アイテムの付け替えなども慣れてきた。

属性アイテム。

ゲームでは敵に属性が設定されていた。

それは種別によって設定されているわけではなく同じ種類のモンスターでもそれはランダムになっていた。

地水火風と光と闇。

地水火風はそれぞれ相性が存在し、的確な相性にしないと防御では最悪は1・5倍のダメージを受け、攻撃では0・75倍のダメージしか与えられないこととなる。

その為、的確な装備アイテムを付け替えるということが必要となる。

ゲームではそれをショートカットで設定できていたが、実際には異なる。

盗賊ならば遠距離からそれを見破るスキルもあったが、戦士には

ない。なので実際にダメージを与えて、受けてみてそれを即時に判断し付け替えていた。

右腕のリストバンドで防御属性、左腕のリストバンドで攻撃属性が決まる。

その為なのか鎧のベルト部分にリストバンドを付ける部分があり、そこに全属性のリストバンドを付けっ、それを付け替えつつ戦うというのがショートカットの代理となる感じだった。

またゲームでは闇は実装されていたが光は実装されていなかった。しかも闇はレアアイテムで、かつ闇属性や光属性の敵もいなかったため、それについては透も気にしていなかった。

戦いに高揚感が増すのは戦士としての性なのだろうか。

幸いここの敵は最下層近くでは無い限り魔法を使ってこない。

それが一番の救いだ。

戦いでわかったことは死体が残らないことだ。

死ぬと同時にお金を残して消えて行く。

アイテムを落とす敵の場合にはアイテムを残して消えて行くのだろうか。

その辺りもゲーム通りなのが透には不思議だった。

斬ることで血しぶきは上がり、返り血も受ける。

切られれば血も吹き出る。痛みも伴う。

しかし敵を倒せばその返り血すらも消え、一定時間で自分の血も傷もすつと消えていく。

便利といえば便利だが不思議に思う。

また痛みも本来ならかなりひどいはずの怪我でも現実のように思

えない程度だった。

足の小指を打ったという話を聞けばなんか自分も痛くなってくる感じ、といえかわかるだろうか。その程度の痛みでしかなかった。

あまり深くまでは潜らずに表層近くでの戦いを続ける。

そんな戦いを繰り返していく。

途中では大したアイテムも落とさないがそれなりの経験値も入る。微々たるものだが。

経験値が一定量貯まれば神域への通行許可が降りる。

通常はHPやMPの増加のためだが、今の状況は異なる。

現状を正すにはその知識が必要だ。

神が教えてくれるとは考えられないが……。

そんなことを考えつつ透は敵を倒し続ける。

自分自身のみに対するHP回復魔法セルフヒーリング。

そういった魔法系スキルも一部だが持っている。無いよりはましという程度だが。

また戦士スキルの一つ武器防具の修理スキル。

これがあれば防具や武器を修理に出す必要がないかなり便利なスキルだ。たまに失敗してしまい壊すこともあるがスキル熟練度が高いのでめったに壊すことはない。

これで同じランクの後衛が入ればドラゴンとすら戦えるのだが、生憎同レベルの後衛とは出会っていない。

しばらくは様子見といったところだろうか。

鉱山の中では時間の感覚が薄れるが腹の減り具合で適当に昼頃に

なると外へ出て食事をする。

午後には武具の修理。

そんな毎日を透は過ごしていた。

第5話 出発、ロックウッド？

決めていた1ヶ月が過ぎる。

テントや竈はそのままに残している。

そして自分がエルシアであることも岩壁に書きこみ、連絡をしてくれるよう書きこむとロックウッドを後にすることにした。

「これからどうしようか……」

透にはこれからの行動方針が浮かばない。

元の世界へ帰る方法を探したいが、その方法が全くといってわからない。

もし自分と同じような存在がいるのなら、噂にはなるはず。

しばらく街にいてその情報が出てくるのを待つか、自分自身がその噂の原因となるか。

受動派と能動派。

透は能動派だった。

自分自身がその強さを見せつけければ、噂になるだろう。

そうすれば同じような人がコンタクトをしてくるだろうと考えた。

そうと決まれば透の行動は早い。

地下墓地の地下3階どころか最下層である地下60階までの道のりも覚えている。

他のダンジョンについても同様だ。

パツティアのダンジョンやシュベルのダンジョン等々。
レベル11では最上層ですら危険な場所だ。

鉱山の結界や地下墓地の結界のようにモンスターたちが街へ入り込まないようになっていいるのだろう。

まずはミールに戻って依頼を受けまくりランクを上げていく。
おそらく透は一気にランクを上げていくことになるだろう。

それでいい。

そうしなければならぬ。

そんな思いが透の中で確定していく。

鉱山で狩りを続けても結界の中での戦闘は人に伝わらず噂になるには時間がかかる。

最も大きな街ミール、もしくは王城のあるリュケイオンが望ましい。

すでに鉱山で自分の強さを確認していたが、透は念のため地下墓地で自分の強さを再確認するつもりでいる。

地下墓地は強さを確認するのに向いている場所だ。

おおよそ5から10階ごとに新しいモンスターが登場し、1階ごとに強さが跳ね上がっていく。

最下層付近では上級魔法すら使ってくるモンスターが出てくるが、それまでは大した魔法を使ってくる敵もいないためエルシアの体であれば無難にこなすことができるだろう。

鉱山の敵よりは弱いからだから。

全てゲームと同じ場合、という但し書きがつくが。

さすがにエルシアの体でも上級魔法が連続で飛んで来ると死んでしまう。

ゲームでは死んでも生き返ることができるが、実際にはどうなるかわからない。

できるだけ死なないためにも最下層付近へは踏み込まないことも透は決めた。

透はそんなことを考えながら町の入口、乗合馬車の駅へと向かう。しかしそこには何もなく、ただガランとしているだけだった。

ロックウッドへの乗合馬車が少ないことを透は失念していたのだ。

馬車が来るまで待つか、歩いてミールまで戻るか。

馬車で10日、歩きだと1ヶ月以上かかる距離。

しかも馬車はいつ来るかもわからない。

透は仕方がなく歩くことにした。

装備を気に入っているラビリンスメイルにして、武器はアスカロンのまま。

この世界ではある意味異様な光景だった。

高レベル者しか装備できないラビリンスメイルに大剣を背負った女性。

見掛け倒しとしか思えない。

だがその足取りは軽く、わかる人間が見ればそれは確実に使っていることが見て取れただろう。

一日歩き、野宿をする。

そこで透はさらに忘れていたことを思い出した。

乗合馬車でももちろん夜は野宿をするのだが、その料金には食事
も含まれていた。

つまりは食料が足りないのだ。

周りは森だし、獣はたくさんいることだろう。

しかしモンスターの狩り方は知っていても、獣の狩り方がわから
ないのだ。

モンスターは倒しても消えてしまう。

モンスターを食べたくはないが、消えてしまうのではどうしよう
もない。

携帯食料は数日分あるが、逆にそれだけしかない。

「はぁ……戻るしかないのか……」

透はため息を付き、ロックウッドへ戻るしかないことを悟る。

今晚はここに野宿をして翌日はロックウッドへ向かう。

そうせざるを得なくなってしまった。

運がよければ乗合馬車が来るかも知れない、などとつぶやきなが
ら……。

透は木を背にしてアスカロンを抱いたまま眠る。

一人旅は危険が大きい。

このあたりの森ではまともにエルシアにダメージを与えられるモ
ンスターがいないことも知っている。

不意を突かれても多分大丈夫と、かつてに安心して眠ることにし

た。

何度目かのため息と共に。

夜中に狼らしい吠え声が聞こえるたびに透は目を覚ましたが、近くに寄ってくることはなく、多少寝不足の状態で朝を迎えることになった。

そして焚き火をちゃんと片付けると来た道をもどって行く。

途中、ガルウルフという体長が3メートルを越える狼と出会ったが、素手でのウィングブレードで一撃のもと倒した。

「どこの超人だよ。こんなことできるのは」

やはりエルシアの体のスペックは高い。

夕方頃にはロックウッドの街へとたどり着き食料を仕入れた後、宿屋へ向かう。

寂れた街でも一応宿屋はある。

墓場には入れなくても墓場の外からお参りをする元の住人達用だ。繁盛しているとは言えないが、なくてはならないものなのだろう。裏には畑もあり、自給自足の生活が基本なのが伺える。

「いらっしやい」

宿屋の女将らしい人物が声をかけてくる。

「珍しい格好だね。初めて見るよそんな鎧は。でも似合ってるね」

「やっぱりそうですか」

他にも見たことがあれば同じような人がいると考えられ嬉しかったが、やはりそんな都合良くはなかったようだ。しかし褒められたことは単純に嬉しかった。

「食事はどうするね？」

「頂きます。後部屋は空いてますか？」

「もちろん空いてるよ。そうそう人は来ないからね」

「じゃあ、一部屋お願いします」

「何日泊まるんだい？」

「とりあえずは一泊ですね。明日にはここをたってミールまで行くかと思っってますから」

「ミールまで歩きかい？まあ、仕方が無いか次の乗合馬車が来るまで30日はあるからね」

「……そんなに来ないんですか？」

透の運は悪かったようだ。

「だあね、まずこの街には墓参りの季節にしか来ないし、今は季節外れだからね」

「季節外れ、ですか？」

「そうそう、死者の町ができた季節にはそれなりに人は来るんだよ」

「なるほど、そうでしたか」

「食事は部屋でとるかい？それともここで食べていくかい？」

「部屋でお願いします」

「どの部屋も空いているから好きに使っておくれ」

そう言って女将は階段を指さす。

「わかりました」

「出来上がり次第持つて行くからね」

透は女将が指さした階段へと歩を進め、一番手前の部屋に入ることにした。

ラビリンスメイルを脱ぎ、ブラウスを羽織る。

少し待つと女将が食事を持ってきた。

スープとパン、それに新鮮な野菜のサラダだった。

「食べ終わったら食器を部屋の外においてもらえばいいからね。ゆっくりしておきな」

そう言って女将は部屋を出て行く。

透はその食事を取る。

スープには謎の肉と野菜。野菜も見ることがない野菜が並んでいる。

しかし香りはすごくいい。

一口粗食するとそのおいしさが口の中に広がってくる。

しばらくの間、携帯食料ばかりだった透には温かいだけでも美味しく感じるのだが、それを増しても十分なおいしさだった。

食事を終えると食器を部屋の前に起き、ベッドに横たわる。

これからのことを考えようとしたが、二日間の歩きで疲れたのかすぐに寝入ってしまった。

第6話 迷子

翌朝、トントンという扉を叩く音で目を覚ます。

「食事ができたけど、運んでいいかい？」

透は頭を振り目を覚ますと「いいですよ」と返事をした。

食事は相変わらずスープとパンにサラダだった。

ただスープの内容がほぼ野菜になっていたことぐらいだ。

目を覚ますにはちょうどいい。

「ありがとうございます」

「最近の冒険者にしては礼儀が正しいね。いつもなら難癖をつけてくるものなんだが」

「そうなんだ……」

「それに引き換えあんたはいいね。今日出て行くにしてもまた来ておくれね、サービスさせてもらうよ」

「ありがとうございます」

食事を終わると、ラビリンスメイルとアスカロンを装備し、食器を階下へと持っていく。

「そんなことはしなくてもいいのに」

苦笑を交えながら女将が答える。

「いえいえ、これぐらいはしないと。それでは出発します。また来るときにはもっと強くなつてきますので」

透は社交辞令のように答えた。

「冒険者は強くなることよりも生きること大事にしろ。それが何よりのお礼だよ。たまに来てくれるとお金に困ることがない上に安心できるからね」

「ええ、またここへは戻つてくると思いますのでよろしくお願いします」

「と、そうだったそうだった。もし私のように巨大な剣を持った人や見たことのない服装の人たら来たら私のことを話しておいてくれませんか？」

「ん？ いいよそんなことなら」

「これはその為のお代です」

そう言つて金貨を数枚渡す。

「こんなに受け取れないよ」

「大事なことなんです」

透は叫ぶように強調する。

「わかったよ、とりあえず預かっておくよ」

透のその剣幕に女将は金貨を受け取った。

「それじゃ行つてきます」

「あいよ、気をつけてね、最近は街道にガルウルフが出現するみたいだから気をつけてなよ」

「ええ、わかりました」

一撃で寸断したとは言えない透だった。

こんどこそ十分に食料を整えてミールを目指して出発する。

10日目に村らしきものが見えてきた。

それまでにガルウルフが2回、ジャイアントマンティスと数回遭遇した。

ガルウルフからは狼の皮、ジャイアントマンティスからはカマキリの目玉というアイテムを手に入れることができた。

いわゆるドロップアイテムというやつだろう。

ドロップアイテムを手に入れやすいように倒すときには細心の注意を払ってみたがドロップ率は変わらようだった。

出るか出ないかは完全に運だった。

それはともかく透は村を来るときには見た記憶がない。

馬車で来ていたとしても途中でここに寄り休憩を挟むはずだ。

それがなかったということは道を間違えたのではないかと透は考えた。

しかし食料品、特に新鮮な野菜や果物の補充が欲しかったため今日はこの村で休むことにして村へと向かう。

村は簡素ではあるが柵がめぐり回されており、入り口には門番が立っていた。

門番は透を見かけると声をかけてきた。

「見かけない顔だな。姿を見る限り冒険者か？」

「ええ、そうです」

ドッグタグを胸から取り出す。

門番の嫌な視線が胸元に行くのがわかる。

(そういえば女だった……気を付けないと)

気を取りなおしたのか門番はドッグタグを確認した。

「ランク1か。よくここまでこれたな？ ガルウルフはでなかったか？」

「大丈夫です。これでも結構強いんですよ」

「たしかに見かけただけは強そうだからな。それが見かけただけではないということか」

「ええ、もちろん」

「今日は此処で泊まるのだろうか、その後はどこへ行くんだ？」

「それって取り調べですか？」

「いや、単純に好奇心だ。こんな辺鄙なところに来るやつは珍しいからな」

「ロックウッドからミールへ向かうところですか？」

「ミール？ 途中で道を間違えたんじゃないか？」

「やっぱり……来るときにこんな村を見た記憶がないな、と」

「こんな、とはひどいな。こんなところだからこそ開拓をする必要があるのさ」

門番は苦笑する。

「すみません」

自分の失言に気がついた透は素直に謝る。

「いって、気にするな。それに一日とはいえガルウルフを倒せる冒険者がいると心強いしな」

「ははは、それは期待してもらっていいですよ」

透にとってはガルウルフ等余裕だ。

森の最奥でも問題ない。

さすがに最奥には森を作らないだろう。あそこには妖精が畏なども仕掛けてあって危険過ぎる場所だ。

「と、まずは宿屋だな。宿屋と言っても村長の家が兼任でやっている感じだがいいか？」

人が少ないところなので良方がないのだろう。

「ええ、かまいません。野宿から開放されるのが嬉しいです」

素直な言葉を透は返す。

「ははは、正直だな。いや女性にとっては重要なことか」

「そうですね」

「で、村長の家だがあそこに見えるひとときわ大きい家だ。わかるか？」

門番が指さす方向には他の家より一回り大きな家があった。特に立派というわけではなく一回り大きいというだけだった。

「はい、わかります」

「それじゃ、あとでな」

「はい……あとで？」

「ああ、外から人が来た場合には歓迎会を開くことにしているんだ。まあ目的としてはこの村の宣伝だな」

「ほお」

「見ての通りこの村には人が少なくなてな。人が増えると開拓がしやすくなるんだ。ロックウッド行きが馬車が立ち寄ってくればありがたいんだが、まだそこまでも知られていないのが現状なんだ」

「たしかにそうですね。ここに乗合馬車が寄っていれば適当な休憩にいい場所ですからね」

「うんうん」

門番は首肯する。

「早速、村長の家に向かいます。では後ほど」

透は門番とわかれると村長の家へと向かう。

村は10数軒程度しかないのですぐに村長の家に到着する。

「こんにちは」

扉をたたきつつ透は声をかけた。

第7話 シュティの村

シュティの村。

それはロックウッドの村から出たものが、開拓民として集まったのが最初だった。

ロックウッドから近く、しかし多少は離れた場所。

墓参りには行きたいが、一番近くの街ミールでは遠すぎる。そう考えて作られたのがこの村だった。

亡者の襲来は十数年前のことでもあるので、この村自体も出来てからそれほど時が経っていない。

名前の由来は村の建設を最初に考えた女性の名前。

シュティが亡くなった際にその名前だけでも残そうと名前のなかった村に付けたのがその始まりだ。

ミールからロックウッドへの馬車が通る際に立ち寄るにはちょうどいい場所でもあるのだが、街道から少し離れた場所にあるため未だ知名度が低い。というより知っている人の数が圧倒的に少ない。

街道沿いにつくろうという話も最初はあったのだが、盗賊たちの襲来を恐れて少し離れたところにつくろうと考えたのだ。村が大きくなればそれなりの防衛もできるし、街道からも遠くはないのでロックウッドから離れた人たちもやってくるだろう。

昨年、ようやく村の防衛柵が完成し、これから村の宣伝をしていこうというところにちょうど透がやってきたのだった。

「はい、今行きますよ。ちょっとまってくださいねえ」

透の扉を叩く音の中から女性の声が響いてきた。家の煙突から煙が出ていたことから料理中だったのかも知れない、と透は思った。

しばらくして扉が開き、妙齡の女性が顔を出した。

「あら？ 冒険者の方？」

「はい、エルシアといいます」

透はドッグタグを見せながら自己紹介をする。

高橋透と名乗りたかったがドッグタグに書かれている以上、そういうわけにもいかない。

エルシア・トールとでも今後は名乗ろうか、などとふと頭の中で考えた。

「こちらで泊めていただけると門番の方から聞いてきましたので、尋ねさせていただきました」

「あらあら、それじゃ今晚は宴会ね。大変、準備しないと」

そういって透を置き去りにして女はまた家の中へ入っていった。

「……………」

どうしたものかと考えていると今度は初老の男性が扉から出てきた。

「すみませんね、家内は慌てん坊で……………」

「いえ、大丈夫です」

「宿泊所にご案内しますよ。といっても集会所みたいなところがね。あつ、私はドルークといいます」

「私はエルシアです、よろしくお願いします」

ドルークは外に出て透を促し歩き始めた。

宿泊所は村長の家の裏手にあり、平屋建ての広い建物だった。

建物的には村長の家とも繋がっているため他の家よりも一回り大きくなっているのだった。

「ベッドとかはありませんがここで泊まってください。毛布は自由にお使いください」

その中はそれなりの広さのある空間があり、端の方に毛布が重ねられていた。

「ありがとうございます」

「それじゃ後ほど、皆が集まってきますのでその前にでも食事等もその時にお出ししますよ」

「わかりました。宿泊料金はいくらですか？」

「いやいや、こんなところで泊まっていたくのに料金なんか取れませんよ。それにこの村の人は娯楽に飢えております。なにか騒ぐ理由がほしいんですよ。時折ここで集会という名の宴会が開かれるぐらいですよ」

ドルークは笑いながら答える。

(宴会のネタにされるわけか……)

透は引きつった笑いを出すのが精一杯だった。

透が中にはいったことを見届けるとドルークは外へと出て行った。透は気配察知 - ゲームでは小マップで表示されていた - で人がいないことを確認すると鎧を外しブラウスへと着替えた。いきなり鎧が消えると不思議に思われるかも知れないので鎧と剣は端の方へ置いておく。

戦士スキルの一つ「武器修理」でブラウスなども綺麗になっている。不思議なものだが、ゲームでは服も鎧扱いなので修理スキルで治すことができる。それしか服を持っていないのも問題があるとしてミールについたら他の服も買おうと透は考えながら座り込んだ。

しばらくすると先程の女性がトレイに乗せてお食事を運んできてくれた。

「お食事です。しばらくするとみんなも来ると思うので食べちゃっててくださいね」

透の前にトレイを置くのと急いで外へ出て行った。

食事は硬いパンとシチュー。パンはシチューにつけながら食べるのだろう。シチューには野菜ときのこと、何かの肉がふんだんに盛り込まれておりいい匂いを漂わせていた。

何の肉かは考えなくても問題ないだろうと透はガツガツと食べ始

めた。

その様子は女が食べる様ではなく男のものだ。女になって日が浅い透に女のように振舞えと言っても無駄なことだろうが、その様子を誰かが見たら引いたことだろう。

食事を終え、しばらくすると数人の女たちが入ってきて軽い食事を部屋の真ん中辺りに並べていく。

女たちが入れ替わり立ち代り出入りするのを透は眺めていた。徐々に男もそれに混じり始めた。

男が持つてくるのは主に酒と思しき物。

最終的には十数人の大人と数人の子供が残った。先ほど出会った門番の姿も見える。

皆が円を描く様に座り、透もその中へ促された。村長のところにいた女性がみんなが揃ったことを確認すると立ち上がり手を叩いて注目させる。

「みなさん、今日は冒険者のエルシアさんが来られたことを祝しての宴会です」

おー、という声上がる。

「私がこの村の村長を務めているウーリスです。宜しくお願ひしますね」

透に向かってウーリスは頭を下げる。

「え？ ドルークさんが村長さんじゃないんですか？」

つい透は声を出す。

「村の中の雑事をこなすには普段村の中にいる人がやらないと、っていうことなんだよ」

「そうそう、男達は畑や狩りなどであまり村の中にいないからね」

口々に透に説明してくる。

シュティの村ではシュティが女性だったこともあり、女性が村長をやっているのだった。

村の規模が大きくなれば変わるかも知れないが、今のところは皆納得している。

「宴会を始めます。みなさんコップはもちましたね」

透にも酒がなみなみとつがれたコップが渡される。

「それではカンパニー」

木製のコップを持ち上げて乾杯の音がそこらじゅうから聞こえてくる。

子供たちも喜んでコップを持ち上げている。

そんな時だった。

「モンスターが現われたー！！」との声が響いたのは。

第8話 シュティの防衛戦

モンスター。

それはそれは人に危害をもたらす存在。

ゲームでは経験値やお金、アイテムなどをドロップする存在だが、本来NPCだった人達にとっては異なる。死をもたらす死神のようなものだった。

男達はたちはすぐに立ち上がり、外へと向かう
女達は子どもを守るようにして扉を見つめる。

透は一瞬逡巡するとアスカロンを手にして外へと向かった。

気配察知では赤く表示されるそれは、明らかにモンスターのもの
だった。

それが村の両側から多数押し寄せてくるのが透にはわかった。

見えてくるモンスター。

それはヴェアウルフの集団だった。

ヴェアウルフとはいわゆる狼男である。

多少の知恵を持ち集団で行動する。

ゲームではプレイヤーを見かけたら攻撃してくるアクティブモンスターだった。

男達は外に出たもののその圧倒的なモンスターに対処できないことを悟った。

もはやこの村は絶滅しかない。

だが透にとっては違う。

「みなさん、中に入っていてください。私が倒します」

「だがあんな数では……」

「大丈夫です、あの程度の数では問題ありません。言い方は悪いですが外にいられると足手まといです」

「しかし……」

透は村人の一人に的を絞ったヴェアウルフに指弾でこちらに注意を引きつける。

それを見た村人はおじけつつ答えた。

「わかった、中で女たちを守っている」

ドルークが宣言すると男達は中へとうながす。

中へ入っていく男達に的を絞ったヴェアウルフを中心に透は指弾を飛ばしていく。

指弾は指を弾いて空気弾を飛ばすものだ。

ダメージとしてはたいしたことがないが、後衛を守るために注意を自分に向けるための戦士スキルの一つだった。

全部のヴェアウルフの的が自分に向いたことを確認した透は、ウイングブレードやトルネードブレードなどを駆使してヴェアウルフを始末していく。

ウィングブレードは前にいる敵に対して鎌鼬を発生させ遠距離攻撃する技で、トルネードブレードは剣をふりまわし自分の周りにいる敵を一度に攻撃する技だ。

アスカロンを装備した透にとってヴェアウルフは雑魚も同然。素手でも余裕だろう。鎧を着ていなくても大したダメージを受けない。

しかし数が多い。

ゲームでもこんなに数が一度に現れたことがない。

一種のイベントなのだろうか。そんなことが頭をよぎる。イベントとして村を襲う。それをプレイヤーが退治する。ゲームでは隠しパラメータとして功績値なるものがあつた。それを大量に稼げるのがこういった襲撃イベントだった。

ゲームでやっていたとしてもプレイヤーに疲れが出るように、今の透でも疲れが溜まってくる。プレイヤーがたくさんいれば奪い合いになるぐらいで大して疲れもしないし、いつでもログアウトできる。だが今はそんなことはできない。

その疲れで当初は効果的に出せていた技も、失敗し始める。

幸いなことは村人たちが的になっていないことだけ。門番の当番だったものも含めて全員が一箇所に集まっている。透はそこを守ればいいのだ。

後続がどんどん森から溢れてくる。その中にはガルウルフの姿も見える。

透の周りには金貨や銀貨、ドロップ品がたまってきた。

それに足を取られないように戦わなければならない

(ドロップ品がこんなに厄介だったとは……)

魔法使いならば全体攻撃の魔法もあるが戦士にはそんなスキルはない。

一体一体確実に仕留めるしか無いのだ。

一撃で死んでくれるのが救いといえば救いだ。

最強武器アスカロン、最低防具ブラウス……。

それでいて数えきれないヴェアウルフの群れをさばっていくエルシアの姿は、隙間から覗いていた村人に神の降臨か悪魔の所業かと震えさせるのに十分だった。

だがその様子は安心させるものでもあった。

自分たちが足手まといになると言われたときには疑問もあったが、その言葉に嘘はなかったからだ。

ついに透は膝を付く。

ダメージはないが疲れによるものだった。

片膝についても透は剣を振り続ける。

スキルを使い続ける。

剣を振る力も無くなってくると、剣を地面に突き刺し素手で攻撃をする。

素手だと一撃では死なないがそれでもダメージは十分に与えられる。

透としては村人が襲われなければ問題ないのだから。

たまに集会所へ向かおうとするガルウルフやヴェアウルフには確実に指弾を飛ばす。

ゲームをしていたときにはこのスキルがかなり重要だったため、他のスキルは失敗してもそれだけは確実にこなっていた。

そんなことを繰り返し、空が白み始める頃になってようやく森からの襲撃は収まり始めた。

透は剣で体を支え、残りを確実に始末していく。

そして夜が完全に空けるとときにはすべての敵がいなくなっていた。気配察知でも姿が見えないことを確認すると疲れから透は村の真ん中で剣を背に眠り始めてしまった。

村人たちの歓声を子守唄にしながら。

第9話 ラーフの化身

シュティの村人たちは考える。

十数年前の襲撃も今回の襲撃もなぜ自分たちばかりが酷い目に合うのか。

しかし前の襲撃でも冒険者たちは果敢に立ち向かってくれた。今回でも冒険者であるエルシアが一人で戦ってくれた。

透は冒険者に対する信頼は高めたと言える。

一部の地域では冒険者はその力を持つて暴れたりもしており、嫌悪の目で見られることもあるのだが少なくともここでは違った。

エルシアの行動も悪魔のような所業ではなく、神の使いのような目で見つめていた。

ブラウスは傷ついているものの体に傷らしい傷もなく、返り血もないことがそれを加速させていた。

透は未だ知らないが、透にとつてやはりゲームか、という感じだったのだが普通の場合には異なるのだ。

戦いを終え、村の中で剣を背に眠るエルシアに毛布をかけ、拝むようにその姿を見つめる。

家々をモンスターによつて壊されたが命があればいくらでも作り直せる。

その生命を守ってくれたエルシアはシュティの村では語り継がれることとなるだろう。守護神のような存在として。

エルシアを見守る一部の人をのぞいて、シュティの人々は後片付けを始めた。

モンスターからドロップしたものを透に渡すために集める人たち。

壊された家を片付ける人たち。
再びの襲撃を警戒して村の周りを見まわる人たち。

透の知らないところすでに村は復興を開始していた。
透はそんな中、相変わらず剣を背に眠っていた。

村人は時折、作業を止めてその姿を見に来る。
エルシアを心配し、安心感を得るために。

昼過ぎになって透はようやく目が覚めた。
体の節々が痛い、動かないほどではない。
剣を杖のようにして立ち上がる。体から毛布が滑り落ちて、誰かが掛けてくれていたことを知る。
ありがたかった。

透が起きたことに最初に気がついたのは、ずっとそばにいたウーリスだった。

「おはようございます、エルシアさん」

「もう大丈夫？」

再びの襲撃を警戒して透は尋ねる。

「それはこちらのセリフですよ。あんな無茶をして」

透はそれに苦笑を浮かべるしかない。
いろいろなところがゲームと変わらないがNPCといえど人は人命は命である。

自分の強さを知っているだけにやらなければやらないことはやる。

それだけだった。

「エルシアさんはラーフ神の使いだったんですか？」

「ラーフ？」

「あそこまで戦えるなんて、ラーフ神の化身としか思えないってみんな話していますよお」

ラーフ神。

ゲームでは戦士の神だった。

戦士となるにはラーフ神の神殿へ行かなければならない。

そこで神託を受け戦士という職業となる。

神域に行けばラーフ神とも直接会うこともできるが、透にとって
はただのNPCだった。

「いや、たしかにラーフ神の神託で戦士にはなったけど、化身とか
そういうものじゃないよ」

「やっぱり神託は受けたんですね」

ウーリスは拝むように透に膝まずく。

「いやいや、そんなことをしないでください。冒険者で戦士なら誰
でも受けるものだから」

そんな話をしている間にも村人たちが集まってきて、やはりウー
リスと同じように拝み始める。

「やめてください、そんなことは」

透が慌てて言っても村人たちがやめる様子はない。

エルシアの戦いぶりを見ていた村人にとってはまるで神話に伝えられるラーフ神の戦いのようなだったからだ。

神話では悪魔たちの神であるベルフ神が他の神々に対し、悪魔たちを率いて戦いを挑んだことがあり、そのとき他の神を先導し最前線で戦ったのがラーフ神であった。ラーフ神は大量の悪魔たちに囲まれても戦意を落とさず戦い続けたという。

ベルフ神は地下深くに追い込まれ、ゲームでは死ぬとベルフ神のもとに送られてから生き返るといふ、いわば閻魔のような存在となっていた。

冒険者が戦士という職業になる際にラーフ神の神託を受ける必要はあることは村人たちも知っているが、それでもあの戦いは神話を彷彿させるに十分であり、エルシアがうけた神託は普通の冒険者のものとは異なっただものだったと思っていた。

まあ実際にゲーム上での神託とNPCの神託とは異なるとはいえ異なるのだが、透にとっては同じものだという認識がある。

モンスターにしても数が多くて疲れはしたが、それだけのことである。

守る戦いはゲームでも戦士の重要な役割であり、戦闘開始こそ驚いたが初期段階では範囲攻撃が可能な魔法使いがいれば楽なものになあ、などと考える余裕もあつたぐらいだ。

やめるようにお願いしてもやめてくれない村人たちに透はもう諦めるしかなかった。

小一時間ほどしてようやく透は拝み地獄から解放されることとな

ったが、続くのはその恩恵をと子供をつれてくる親たちだった。

透はその子どもたちの頭を撫でてあげる。

子供たちは無邪気なもので、英雄が目の前にいると騒ぎ、頭をなでられると嬉しがっていた。

親たちも頭を下げつつ子どもを連れて家へと向かっていった。

残ったのは透とウーリス、ドルークだけだった。

ドルークは大量の毛皮を抱えており、その横にも大量の銀貨や金貨が置かれていた。

モンスターからドロップしたものらしい。

倒した数が半端ではないので、ドロップ品も半端じゃない。

「エルシアさん、こちらをどうぞ」

そうドルークは促してくる。

透は頭を抱えた。

(こんなモノ貰っても……)

透は十分すぎるほどのお金は持っているし、毛皮なんかは森に入り込めば簡単に手に入る。

「いえ、それはこの村の復興に使ってください」

透はそう決めた。

「そういうわけにもいきません。これはエルシアさんが倒して手に入れたものです」

ドルークもウーリスも、そしておそらく村人たちもそれらは全て

透に渡さなければならぬと考えているのだ。

(どっしりよう……そうだ！)

「ではこうしましょう。私は行かなければならない場所があります。その為にも名を上げなければなりません。これからどんだん名を上げていくつもりですがこの村に訪れた人に私がいた事を伝えてください。その代金としてそれは受け取ってください」

そう透は伝えた。

透としては逆にさらなるお金を与えてでも名前を伝えて欲しいところである。

「そんなことでは恩返しにはなりませんよ。おそらく誰かが来るたびにエルシアさんのことは話すことになるでしょうから」

ドルークは苦笑する。

「いえ、これは重要なことなんです。確実に伝えてもらわなければなりませんので」

透としてもこれは引き下がれないところである。ランク11ではできないことをやってのけた冒険者の名前が伝われば、同じようにこの世界に来た人と出会う可能性が高くなる。

もう一人同じレベル99の人間がいれば深層へ潜ることも容易く、神域へも行けるだろう。

透のその剣幕にドルークも引き下がるを得なくなった。

「わかりました。これは預かっておきます。誰かが来るたびに伝え、

その証拠とします」

「いや、それは盗賊に狙われる可能性が高くなりますから、村の復興と拡張に使ってください。それだけあれば十分にできるのではありませんか？」

「たしかに残しておいては危険ですね……。ではこの村を大きくしてエルシアさんのことを大きく伝えられるようにします。それでいいのですか？」

村が大きくなれば伝わる速度も早くなる。

「ええ、それをお願いします。私が行かなければならないところは名を上げたその先にありますので」

「それはラーフ神？」

ウーリスが尋ねてくる。

「そうかも知れませんが、そうではないかも知れません。今のところはわかりませんが、少なくともラーフ神にも会わなければならぬと思います」

「そうですね、ではこれはラーフ神からの贈り物と思って受け取らせていただきますね。そしてラーフ神の化身が現れたとエルシアさんのことを伝えることにしますね」

ドルークはまだ納得していないような顔だったが、ウーリスは微笑みながら受け取ることを決めたようだった。

「化身というのはやめてほしいですけどね」

透は苦笑しながら答えた。

「決まったところで私は出発しますね」

「え、もう行かれるのですか？」

「ええ、少しでも早くミールへ行き、先ほど言ったように名を上げていかなければなりませんので」

「そうですかあ、それじゃ引き止めるわけにもいきませんね。宴会の続きが出来る状態でもありませんし」

「はい、また来たときの楽しみにしていますよ」

透は微笑みつつ答えた。

そして集会所に向かうとラビリンスメイルを装備する。

集会所から出るとそこには村人たちが集まっていた。見送ってくれるようだ。

「またぜひ来て下さい」

「次に来たときには村を大きくして驚かせてみせますよ」

「今度は飲み比べをしましょう」

等々、村人たちは透が見えなくなるまで手を振り、大声で叫んでいた。

透はシュティの村を出発し、改めてミールへ向かうのだった。

第10話 ドレス？

シュティの村を出発して半日。
街道が分かれている場所に出くわした。

「ここで間違えたのか……」

シュティの村をでたのが昼過ぎだったこともあり、すでに夜は更けようとしていた。

透はここで野宿をすることにし薪を集める。

ついでとばかり看板を建てることにした。

『ロックウッド』、『シュティ』、『ミール』と書き、シュティの村がわかるようにだ。

これでシュティの村に行く人も増えるだろうと。

それを終わると武具修理スキルでブラウスの修理をし始める。

かなりぼろになっているけど、よく考えればこのぼろさで戦っていたのはドラクローアのフランス革命の絵で自分が自由の女神役みただったわけか。

それなら拝むのもわかる気がする。

女としてはどうかと思うが……。

そんなことを考えながらブラウスを直していった。

鉱山でも確認したが透は自分自身の、いやエルシアの体のスペックの高さを再認識していた。

もとの透であればあんな戦いはできない。

あのときはとっさに取った行動だったが今更ながらにゾツとする。良いことなのか悪いことなのか。だがここで生きていくには良いことなのだろうと考える。

(生きていく? いや、俺は帰らなければならないんだ。元の世界に)

いつの間にかこの世界に馴染み始めた自分自身を嫌悪してしまっ

た。
「神と会う方法は二つ、神域に行くか地獄門に行くか、か」

地獄門。

それはベルフ神のいるところだ。

途中には多数の悪魔がいて、レベル99でもかなり厳しい。いや、一人ではほぼ無理だ。

だが地獄門は経験値を貯めなくても行くことができる。

そんなことを考えながら透は眠りについた。

翌日から歩きに歩いて、ミールへと向かう。

途中でのモンスターを倒してはドロップ品だがお金も不思議だ。財布にいくらでも入るのに重さがない。ドロップ品には重さがある。STR201の透にはほぼ関係ないがお金のもさがないというのはありがたいように思う。

この世界で使われているのは主に金貨と銀貨。

金貨はデユカート、銀貨はグロツソと言うのが正式な呼び方だ。1デユカート＝10グロツソ。

だが大抵の人は金貨、銀貨と呼ぶ。

一時期、国ごとに呼び名があり、金や銀の含有率が異なったためややこしくなったためだ。それらが国同士の取り決めで統一されたおかげで両替商という職業がなくなり失業率が少しだけ上がったのは皮肉な話だ。

とまあ、そういうことで人々は金貨、銀貨としか呼ばなくなった。さらにそれ以外にもグロツソのさらに下の価値である銅貨もある。

それはともかく透の度は順調に進んでいく。

途中でロックウッドへ向かう馬車とすれ違うが、ミールまで後数日というところでもあったので、乗せてもらうことはしなかった。

やがて透はミールに到着する。

まずは宿屋の確保と衣服の確保。

そして銀行へ行って鉱山で使用したフルポーションの補充も行う。

その後は通常の衣服がブラウス1着だけというのは女の体の今となっては問題があると思ったからだ。

これが一番困った。

女性用の服など元の世界でもしたことがない。

衣料店に入って困っていると店員が声をかけてきた。

「よろしければ、コーディネートしましょうか？」

「ええ、お願いします」

幸いとばかり、透はすぐ答えた。

店員は採寸を取りますのであちらへどうぞ、と女性店員の方を促す。

女性店員に連れられて透は個室へと案内させられる。そこで下着姿となり採寸が計られる。

バスト、ウエスト、ヒップと自分のサイズが分かっていくのは透にとって恥ずかしいものでもあったが、自分がいいポージョンをしていることだけはわかった。

STRが高いにもかかわらず筋骨隆々ではない。

やはりゲーム仕様だからだろうか。

採寸が計られ再びブラウスを着て外に出ると、外ではいくつかの服を用意して店員が待っていた。

用意されていたのはペティコートやバタデコーラなどのスカートとそれに合わせた服、どこかの舞踏会できるようなドレスだった。色も髪の色に合わせた紫系から赤や青、刺繍の入った手のこんだものまであった。

透は自分の頬がひきつっているのを自覚するほど焦ってしまった。たしかに今は女だしスカートを履くのもおかしくはない。逆にズボンのほうがおかしいともいえる。

笑顔で店員に試着を促されると透は断りきれず、いくつか試着するはめになった。

そして気がついたときには2着を購入し、店の店員に笑顔で送り出されるところだった。

結局購入したのは花の模様入りのバタデコーラとたくさんの刺繍が施されたドレスだった。

「どこで着るんだよ、こんな服……」

ぶつくさつぶやきながら透は宿屋へと向かった。

宿屋へ向かう途上には露天が多数あり、色々美味しそうな匂いが漂ってくる。

透はそれらの店をひやかし、時には購入しながら歩いて行った。

透は金貨や銀貨は持っていないも銅貨は持っていたが、銀貨で問題なく購入することができた。

お釣りを見る限り銀貨1〓銅貨10ということ透は初めて知ることとなった。

串焼き1本1銅貨、ドレス1着120金貨……………。

透の経済感覚は完全に麻痺していた。

透は入った服飾店が高級服のみを扱っていることを知らなかった。

宿屋に着いたときにはすでに夕方近くになっており、1階の食堂兼酒場はたくさんの人で賑わっていた。

冒険者たちもたくさん居たが、ラビリンスメイルを装備するエルシアの姿は異彩を放っていた。

剣を仕舞っていないかつたらもつと驚いて見られたことだろう。

透がカウンターへ歩いて行くと途中の人は道を開けていく。

女将も少し引いていたが、以前に泊まっていたことを思い出した。

「い、いらっしやい。また来てくれたんだね」

なんとか声を出す。

「ええ、今度は少し長期間になると思いますが、部屋は空いていますか？」

「ああ、大丈夫だよ。どのぐらいの期間になるね？」

透の普通の対応を見て、荒れくれものに慣れている女将はようやく普通の対応ができるようになった。

「とりあえずは1週間。それ以降はその時に考えます」

「あいよ、205号室が空いているからそこを使っておくれ」

そう言って透に鍵を渡してくる。

「食事はどうするね？」

「朝食だけはお願いします。夕食はその時次第でお願いするかと思います」

「あいよ、今晚はどうする？」

「今日はここで食事をお願いします」

「そんじゃ、そこら辺に座ってておくれ。すぐに持ってくるから」

周りはエルシアのことをささやき交わしているが、それに気づかない透は適当に空いている席につき食事を待った。

しばらくして食事を運んできた女将に礼を言い、食事をする。

(やはり温かい料理は美味しい)

透は笑顔で食事をしていたが、周りはその笑顔が消えないように祈っているものまでいる始末だった。

食事を終えると、透は指定された部屋へ入ると鎧を脱いで楽な姿になってベッドへ飛び込んだ。

第11話 ミールの地下墓地

ミールの地下墓地。

亡者の襲来の時に死者たちが溢れかえった場所だ。

外から襲ってくる死者。

地下から溢れ出る死者。

ミールでの亡者の襲来は阿鼻叫喚のものだった。

外から襲ってくる死者には冒険者たちやリュシユケイオンから派遣されていた騎士たちが対応し、地下から溢れ出る亡者には神殿の僧侶たちが対応することでなんとか街は壊滅をまぬがれた。

地下墓地の封印は強力なもので強い死者ほどその影響が出るようなものだった。逆に言えば弱い死者ならば外の近くにまでやって来るということも言える。

それ故にこそ上層部には弱いモンスターが現れ、深くに行くほどモンスターが強くなるという状態だった。

モンスターたちは死者だけとは限らない。

普通の虫でさえその瘴気に触れ、巨大化したり凶暴化したりする。果ては魔法まで使うほどに進化する。

透の知るゲームでは1階では巨大ネズミと巨大ムカデ。

巨大ネズミは素早い行動で攻撃を避け、巨大ムカデは巻きついて食らいついてくる。

ムカデが巨大化した事の代償として毒を持たなくなったことだけが救いだろうか。

レベルが低いうちは巨大ムカデからは逃げつつ巨大ネズミだけを倒すのがセオリーだった。

やがて巨大ネズミを簡単に倒せるようになる。巨大ムカデを相手にするようになる。

巨大ムカデが倒せるようになると地下2階へ。地下2階ではさらに凶暴化した巨大ムカデと巨大ネズミ、そして巨大クモが出てくる。

地下3階では巨大クモは凶暴化し、巨大ムカデは進化して魔法を使うようになってくるのだ。

この魔法が非常に厄介で初級の魔法使いの魔法とはいえレベル1程度では即死する可能性すらある。

またこの階層からは巨大サソリが登場する。

この巨大サソリは毒を持ち、普通のサソリと違って遠距離まで毒を飛ばしてくるのだ。神経系の毒ではなく出血系の毒。ゲームでは徐々にHPを減らしていく効果を持っていた。

魔法と毒。これが地下3階の実情であり、低レベル冒険者を阻んでいる理由となっている。

透はギルドの依頼を受けつつ地下墓地へと向かおうと考えていた。朝起きると、朝食を済ませギルドへと向かう。

朝のギルドは静かなものだった。

大概の冒険者は前日に依頼を受け、翌日以降に依頼をこなしていくのが常だったからだ。だからわざわざ早くにギルドに来ることはない。

とはいってもギルドはいつ来るかも知れない冒険者のために24時間開いたままとなっている。

ファーマシーはちょうど夜番が終わるところに以前に来たエルシアの姿を見かけたのだった。

しかし以前のエルシアとは圧倒的に違うその鎧姿に圧倒され声を

掛けるのを躊躇ってしまった。

透は透で特にファーマシーと話すことがあるわけでもないのに、
依頼掲示板へと向かのだった。

依頼掲示板のランク1以上の場所へ。

その中で一つの依頼が透の目に止まった

『サソリの尾の採取』

(地下墓地のサソリからドロップするあれかな？聞いてみるか。確
か依頼受付だったよな)

そう考えると透は依頼受付と書かれているところへと向かう。

依頼受付の人もファーマシーと同じく夜勤明けで寝ぼけ眼になっ
ていたが、エルシアの姿を見て一気に目を覚ました。

「すみません、この依頼を受けたいんですけど。いくつ集めればい
いんですか？」

「こ、これはランク1の人が受けられるものではありませんよ。み
見かけだけつくろっても危険です」

依頼書とエルシアのドグタグを見てつつかえながらも答えた。

「受けること自体が禁止なんですか？」

「いえ、受けることはできますが、地下3階まで降りないとならな
いことの意味はお分かりでしょう？」

「ええ、それは知っています。でも多分大丈夫ですよ。あっ、逆に

サソリの尾を持ってきてそれから依頼を受ける、という形式はどうですか？ それなら危険だと思ったらすぐ引き上げて違約金も支払わなくて済むし」

（多分大丈夫だけどね）

「そういう事でしたら大丈夫ですね。一応説明しておきますが、ランク1では地下1階でも危険です。巨大ムカデを見たら逃げるようにしてください」

「わかりました。そうすることにしますよ。で、ちなみにこの依頼はいくつ集めてくれればいいんですか？」

「まだそれにこだわるんですか？まあいいでしょう。依頼人からは一本と言われています。一本で金貨500枚です」

呆れたように受付嬢は話す。

「金貨500枚ですか……」

「一攫千金を狙って、ランクの高い冒険者たちがそれを目指していますが未だ成功したことのない依頼です。少なくとも今はやめたほうがいいですよ」

「わかりました、そうしますよ」

透は会話が平行線になるだろうことを察して、こっそり地下墓地3階以下へ潜ることを決めた。

「最初のうちは巨大ネズミの腹の中にある瘴気に侵された果物を集

めてくる依頼とか、森の毒蜂の採取とかの依頼を受けるといいですよ。それぞれ研究者がいて欲しがっていますから。報酬は安いですけどね」

透が諦めたと判断した受付嬢はランク1でもできるような依頼を勧めてきた。

「ありがとうございます。一度潜って自分の実力を試してきます。それから依頼を受けるかどうか試すことにしますよ。まずは巨大ネズミ、ですね？」

「ええ、そうです。さらに安全を期すならパーティを組んでいかれることをお勧めします。弱いとはいえ毎年何人もの人がその巨大ネズミに殺されていますから」

「わかりました、入口付近で一度試してダメだったらすぐに逃げるようにします。もしダメだったらパーティを組んでみますよ」

「パーティを組むのでしたら酒場に行くといいですよ。あそこには冒険者たちが集まっていますので」

「わかりました、ありがとうございます。それじゃ行ってきます」

「死なないようにがんばってね」

受付嬢は手を振りながら答える。

透もそれに答えるように背を見せながら手を振った。

「さてと地下墓地へ行きますかね」

ギルドを出ると透は地下墓地へと向かった。

第12話 スコーピオンスレイヤー

地下墓地の入り口には結界が張られている。

しかしそれは鉾山のように入るものを拒むものではなかった。

透がそこへ入ろうとすると声をかけてくる男がいた。

「嬢ちゃん、大した装備だがここがどんなに危険だか分かっているのかい」

「ああ、それは分かってるつもりだ」

戦いの前の高ぶりからか素の透の言葉が出てくる。

「じゃあ、何もいうことない、行って来い。そして帰ってこい。それだけだ」

「わかった。行ってくる」

そう言い残すと透は地下墓地へと足を進める。

地下墓地の入り口は六芒星で封印されている。当初こそ僧侶たちが作っていたものだろうが、それを永続的に行うために封印の形に石を敷き詰めたのだった。

その中に入ると瘴気が透を襲う。

(なるほど、これが瘴気ってやつか)

本来なら逆の効果을及ぼすはずの瘴気は高ぶっていた透を落ち着かせた。

地下1階、巨大ネズミも巨大ムカデも武器を取ることなく落ち着いて倒しつつ進む。

地下2階、ムカデもネズミもクモも相変わらず瞬殺。
そして地下3階へ。

目の前には傷ついた男の冒険者。もはや息も絶え絶えになっている。

すぐさま透はフルポーションをその冒険者に飲ませる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、今の薬で怪我が治った。礼を言う」

そう言うと男はすぐに立ち上がりさらに先へと進もうとする。

「おい」

「引き止めるなこの先で仲間が戦っているんだ」

耳を済ませるとたしかに剣戟や魔法の音がする。

透も男の後ろ追いかけて行った。

そこはいくつかの棺桶が周りに配置されている大きな居室だった。剣で巨大サソリと戦う戦士たち、その背後には僧侶が控え傷つく戦士たちを癒し続ける。魔法使いはさらに後方からサソリに攻撃魔法をかける。

3人の戦士と2人の僧侶、2人の魔法使い。かなりうまいコンビネーションで戦っていた。

一進一退だった戦いが、先程の男が再び戦線に戻ったことで形勢はサソリに不利になっていく。戦士たちがサソリを完全に取り囲み、僧侶はそれぞれ二人だけの回復に専念すし、魔法使いは相変わらず離れた場所から魔法を使う。

透はそれを見守る。

ゲームでは他人のターゲットを取るのにはマナー違反だと考えたからだ。未だにゲームの感覚が抜けていない証拠だな、と苦笑する。

やがてサソリは倒れ、幾枚かの金貨とサソリの尾を残して消えていった。

「やったぞ、ついに俺達はやったんだ」

「うんうん、長かった」

「これで金貨500枚は俺達のものだ」

そういった声が冒険者達から聞こえてくる。

「そういえば、デーリス、お前最初にやられていなかったか？ いくつかの間に戦線に戻ってきたんだ？」

戦士の一人がデーリスに尋ねた。

「ああ、それはあそこにいる人がポーションを俺に飲ませてくれたんだ」

「ポーション!？」

「あんな高いものか？」

「じゃあ、薬の代金を支払わないとな」

そう言うところの一人の男性が透に近づいてきた。

「君がデーリスを助けてくれたんだって？ 俺の名はダニスだ。よろしく」

「エルシアだ、よろしく」

「薬の代金を払うよ。吹っかけてくれないと助かるんだが……」

それもそうだろう、ようやく手に入れたお金を台無しにされたくはない。

「気にしなくてもいいですよ。たくさん持っていますし、いい戦いを見せてもらったお礼として」

エルシアのドッグタグを見てダニスは驚く。

「ランク1でここまで来たのか？ それは冒険を通り越して無謀だぞ！ だがそのおかげで俺達は助かったともいえるし、強く言うことはできないな。で、俺達の戦いはどうだった？」

「すごく連携が取れていて良い戦いだったと思いますよ。特にデーリスさんが戻ってからは完璧な布陣でしたね」

「それがわかるか。ランク1にしてはすごいな、君は」

透にとっては当然のことではない。敵の周りを取り囲んで後衛に攻撃が向かないようにする。常に指弾を打ち続けて敵の的を魔法

使いに向かないようにしている様子も見取れた。

「それじゃあ、これから依頼を受けて報奨をもらいに行くんですね」

「ああ、君も一緒に行かないかい？ 地上までは護衛するよ」

「いえ、私はここでやることがあるので」

「さつき見ていたとおりここは危険だよ」

それに苦笑いで答える。

「行かなければならない理由があるのかい？」

「そうですね。直接的ではないけど理由はありますね」

「本当に危険だから強引にでも止めるべきなんだろうけど、無理みたいだね」

「ええ、そうしてくれると助かります」

「わかった」

ダニスは首肯すると仲間たちのもとへと戻っていった。

（そういえばゲームではフルポジションって10,000金貨程度だったよなあ。その支払をとか請求したらどうなるんだろう？）

そんな意地悪を透は思いついていたが、ダニスが他のみんなを説得している隙に奥へと足を進め地下4階へと降りて行った。

地下4階では魔法を使うクモとムカデ、サソリがいる。さらにはゲームで最も嫌われた巨大ゴキブリが出現し始める。それらも透は素手で瞬殺する。ゴキブリは出来る限り触らないように……。

(戦いやすいのは6階だったかな。広い一部屋で見渡しが良く、湧く数も多い)

透がそんなことを考えている間、デーリスやダニスたちはパーティの女性陣から非難の嵐を受けていた。

地下墓地の地下6階。

モンスターは地下へ潜るごとに巨大化、凶暴化、魔法使用、魔法耐性、さらなる巨大化というように変化していく。これが5階ごとにモンスターが5階ごとに変わっていく理由である。

6階での透の狙いはさらに大きくなった巨大サソリ。毒液は飛ばす、魔法は使う、魔法耐性といった危険な場所だった。

だが使ってくる毒も透にとっては初歩的な物、すなわち自己治癒力を下回るものでしかなく、魔法についても同様だった。魔法耐性についても魔法を使わない透には関係がない。

新しいモンスターとして4階から現れる巨大ゴキブリ、5階から現れる巨大ヘビ、6階から現れるスケルトンがいる。

さらにここは見晴らしも良くモンスターが隠れる場所もない。そしてその全てがアクティブモンスターで絶好の狩場だった。

レアドロップ品を落とし始めるのがこの階からで、ゲームでは人が絶えない場所でもあった。

ここまで来れば先程の人たちが追いついてくることもないし、安心して狩れる。

透が持っている主に戦闘で使用するスキルは5種類。

前方にカマイタチを発生させて切り裂くウイングブレード。

剣を振り回して周りの敵を一掃するトルネードブレード。

敵の注意を引きつける指弾。

そして四連撃。

四連撃は斬り下ろし、斬り上げ、斬り払い、突きと一連の動作で行う技だ

最後の一つが相手を麻痺させる技である。

相手の神経のツボを的確に突き一定時間行動を不能にさせる技である。

それ以外のスキルは武具修理、セルフヒーリング（MPが低くINTも低いので大した効果はない）、アイテム鑑定、片手剣マスター、両手剣マスター程度だ。

相手の武器を壊す技などもあるがめったに使用することはない。武器を持つモンスターが少ないためだ。対人戦ではかなり影響があった記憶がある。

戦士としては十分だが魔法使いや僧侶などを見るとスキルの少なさに一種のあこがれを抱くことはあった。しかし盾となることを常とする戦士が透には性にあっていった。

透はアスカロンを装備し5階に降りるといきなりスケルトンが襲いかかってきた。

ちよっと焦りはしたが、ウィングブレードで一閃する。

スケルトンの後方からはわらわらとモンスターが透に向かってくるのが見えた。

透はそれに向かって突き進み剣を振るう。

ほぼ一撃でそれらのモンスターは消えていく。

しかしモンスターの数は減る様子が見えないので不思議に思った透は少し下がって様子を見ることにした。

それでわかったことがモンスターの出現方法だった。

モンスターは異空間というのだろうか、霞が実体化するようにしてどこからともなく出現してきていた。本当に「沸く」という感じだった。

(これがゲーム仕様ということか。まあ丁度いい、いくら狩っても問題ない)

シュティの村のように防衛戦というわけでもない。

移動しながら戦えるのでドロップ品に足をとられることを気にしなくてもいい。

透に気がついていないモンスターにも指弾を当てこちらに向けさせる。

小一時間もした頃には、そこらじゅうにドロップ品が転がっている状態となった。

「そろそろ拾わないと足を掬われるな」

そう独り言をつぶやくと、モンスターを避けながらドロップ品を集めていく。

全てのパラメータをSTRに振っていてもこのあたりのモンスターを避けられないほどの速度ではない。

同じドロップ品はアイテム枠では一つで済むのが助かる。サソリの尾、ゴキブリの触覚、蛇の皮、スケルトンの骨が結構な数でアイテム枠内に入っていく。

レアドロップ品である魔法の加護付き武器も2個あった。一つはロングソード、一つはレイピアだ。

「こんなものか」

集め終わると一旦戻ることにし、モンスターを避けながら上への階段を登っていった。

外に出るとすでに夕刻となっており、空が赤くなっていた。

「無事帰ってきたんだな。無茶をしそうに見えたんだがそうでもなかったみたいだな」

そこには地下墓地に入る前に声をかけてきた男がいた。

「ええ、大丈夫でした」

「何匹ぐらいネズミを倒せたよ？ 結構な時間潜っていたんだからそれなりの数だろうがな」

「ネズミとは戦っていませんね。サソリとかスケルトンとかですよ」

「なっ、サソリ!? スケルトン!？」

「そうですね、地下6階で戦ってました」

「……………冗談はやめるよ。昼前に最強と呼ばれるパーティがやっ
と1匹のサソリを倒してきたんだぜ? 嬢ちゃんにはムリムリ」

「これが証拠ですよ」

透はサソリの尾とスケルトンの骨を懐から取り出すようにしてア
イテム枠から一つずつ取り出して、男に見せた。

「おいおいおい、本当なのか? たしかにあのパーティが持ってき
たサソリの尾と同じものだ……。嬢ちゃん本当に潜ってきたんだな
?」

「理解していただけました?」

透は微笑みながら答えた。

そしてさらに続く言葉に男は驚くことになる。

「明日はさらに地下深くに潜る予定です。このぐらいで驚かれたら
困りますよ」

男はもはや声が出せなかった。

透はそれを見届けると武器屋に向かうことにした。

魔法の加護付き武器を渡すためだ。

街の中を通り、武器屋を目指す。

「そんな防具は役に立たねえぞ、飾りなら飾りで部屋にでも置いておけ」

それが武器屋に入った透にかけられた第一声だった。透はそれに苦笑し、手に入れた武器を見せる。

その途端、店主は目の色を変える。

「どこで手に入れた、これを」

「地下墓地の6階ですよ」

「6階……その防具は伊達じゃないってことか？」

「そのつもりです」

「で、これをいくらで売るつもりで来たんだ？」

「いえ、これは売りに来たのではなく渡しに来ました」

売るのではなく渡す。

それに意味がある。

「店主がこの武器にふさわしいと思った人に安い値段で売って下さい。それが渡す条件です」

「暴利をむさぼるかも知れないぞ？」

「もしそんな噂が聞こえてきたら次からは別の武器屋に行くようにするだけですよ」

店主は透の真意を確かめるようにしたあと答えた。

「わかった、ふさわしいと思える冒険者には心あたりがある。そいつに渡すようにしよう。その代わり次も手に入れたら持ってきてくれるな？」

「条件が守られる限り」

透のその言葉に店主はまかせろ、と胸を叩いて答えた。

「ああ、あとその人に伝えてください。『追いついてきてくれ』と」

「そうだな、今のあんたに肩を並べることができるやつを俺は知らねえ。伝えておくよ」

「では、失礼します」

「ああ、またな」

その言葉を聞きながら透は店を後にしてギルドへと向かった。

ギルドでは外にまで響くような騒ぎが起こっていた。ついにサソリの針を手に入れる冒険者が出たからだ。

透はそんな中に入っていくことになった。

「これで、解毒剤が作れます。ありがとうございます、ありがとうございます」「ごじいます」

低頭し、何度も感謝を捧げるローブ姿の男の姿がそこにあった。ローブの男の前には地下墓地で出会ったデーリスたちがいる。

（ああ、あれが依頼主だったのか。しかし解毒剤？ 店で売っている解毒剤じゃだめなのか？）

この世界の相場では安いとはいえないが、ゲームでは金貨500枚もするものではなかったはずだ。

透はその疑問を解決するために低頭する男に話しかけた。

「そのサソリの尾でどんな解毒剤を作るんですか？」

「ああ、あんた、あのときの」

答えたのはデーリスだった。

「あの時は助かったぜ。おかげでたんまり金も手に入ったし、子供たちも助かる。いいこと尽くめだ」

「子供たち？」

「知らなかったのか？ 亡者の襲来で瘴気を浴びた親から生まれる子どもは生まれつき病弱でサソリの針から作る解毒薬じゃないと助からないって言われているんだ」

「そうなんです。本当は国が騎士団を派遣してくれれば何とかなかったのかも知れませんが、騎士団も各地の騒動を収めるのに必死でこの件では動いてくれなかったんです」

低頭していた男がデーリスの言葉を補足する。

「そういう事なら、これも使ってください」

透は今日手に入れたサソリの尾24本全部を取り出してその男に渡した。

沈黙がその場を支配する。

「スコープピオンスレイヤー……………」

そんな中、誰かの口からこぼれたその言葉は瞬く間にその場に広がっていった。

これ以後透はスコープピオンスレイヤー・エルシアと呼ばれることとなる。

第13話 魔法の加護

「これだけあれば、たくさんの子どもが救えます!!」

透はその剣幕に少し引いてしまった。

でも、とローブの男は続けた。

「こんな数のサソリの尾に支払うだけのお金は都合することはできません。1本でも家売り払ってなんとか都合したのですから……」

「気にしないでいいですよ、ついでだったんですから。もし悪用するようなら渡せませんが、子どもを救うために使うのならいくらでも都合しますよ」

「……なんか……俺達、悪人っぽくねえか？」

大金を手にして喜びながらもその様子を見ていたデーリスの言葉だった。

「そうだな、この金は返そう。みんなもそれでいいな？」

ダニスが自分の仲間にかけると、「仕方が無いね」と肩をすくめながら頷いていた。

「いや、でもそれは正当な報酬ですし……」

「ああ、たしかに正当な報酬だ。だから受け取った。その後これら子供たちのために寄付するのは構わないだろう？」

「あ、ありがとうございます。必ず子供たちを救ってみせます！」

「そちらの女性と同じことを繰り返すようだが、気にしなくていい。今回のことでランクも上がったし、さらに高みを目指せることがわかった。それが一番の収入かも知れない」

（お人好し集団なんだな）

透はそのやりとりを見てそう思った。そしてひよつとしたら今日の武器が託せるかも知れない。武器屋に渡す前に此処に来たほうが良かったかとも思ったが、たぶんこの人達に渡されることになるだろうという確信もあった。

「あとで武器屋に寄ってみるといいですよ。おそらくですが今日の報酬の代わりのものが手に入るかも知れません」

透はダニスにそう告げる。

「ん？ どういうことだ？」

「行けばわかりますよ」

そう言うと透は手を振りながらギルドの受付へと向かい、ランクの確認をお願いすることにした。

ランクの確認所は依頼受付所の横に並んでいた。

「ランクの確認をしたいのですが？」

「はい、わかりました。ドッグタグをこちらの水晶球の上にかざし

てください」

透は言われたとおりドッグタグを水晶球の上にかざす。

「おかしいですね。何の変化も見られません。あれだけの事をしたのに変化がないということはないと思うのですが……」

しばらく首をひねっていた受付嬢は「あっ」という声を上げて透に尋ねてきた。

「今日、なんかの依頼をこなしましたか？」

「いえ、結局はこなしていない形になりましたね」

「それが原因ですね。ランクは最低でも一つの依頼を受けなければ上がることはありません。ですが例えば本来のランクが6の人だった場合には、どんな依頼でも5回こなせばランクは6になります」

「なるほど、そういうシステムになっているんですね」

「はい、ですから申し訳ないのですが今回は依頼をこなしていませんのでランクが上がることはありません」

「いいえ、大丈夫です。これからは依頼をこなして本来のランクを表示できるようにしますよ」

謝ってくる受付嬢に告げると、ギルドを後にして宿屋へと向かうことにした。

ランク＝レベルであることが分かっている透には、依頼を98回

受けることは正直なところ面倒に思えてきた。

名を上げるためには別にランクが必要なのではない。今回の武器屋のように魔法の加護付きや神の加護付きの武器防具を手に入れにくるほうがいいのかも知れないと透は考え始めたのだった。

幸い透にはそれらがドロップする場所やモンスターを知っている。他の冒険者を育てる意味でもそのほうが都合がいいかも知れない。この世界に来たのが自分一人である可能性もあるのだから……。

宿屋に到着し食事をすると、部屋に戻り、レベル11やそれ以下でも使える武器や防具が手に入る場所のピックアップし始めた。

(他のダンジョンや森などで手に入るものは後回しにして、地下墓地で手に入るアイテムを先に集めてしまおう。それだけでかなり変わるはずだ)

そう考えると透はベッドに潜り込んだ。

エルシアが立ち去ったギルドではダニス達が相談していた。

「今回の収入がなくなったのは仕方が無いけど、痛いわね」

そう話すのはダニス達の仲間のひとり盗賊のルーリーだった。

「うん、でも幸い武器や防具を修理するぐらいの貯蓄はあるし、明日からまた依頼を受ければいいよ」

そう答えるのはパーティ最年少の魔法使いのデスティア。まだ幼いながらも魔法使いの腕は初老のグルンを上回る実力の持ち主だ。

ダニスたちは8人でパーティを組んでいる。

戦士のダニス、デーリス、レスティ。盗賊のルーリー。魔法使いのグルンとデスティア。僧侶のワイルとアキア。

後衛であるグルン、デスティア、ワイル、アキアは特に修理は必要はないが、前衛たちはそうもいかない。

明日以降のためにも修理をするためにそんなことを話しながら武器屋へと向かい始めた。

武器屋に着いたダニス達を見た店主は、ダニス達が言葉を発する前に二つの剣を取り出してきた。

ロングソードとレイピアだ。

目を丸くするダニス達。それが魔法の加護付きだということが明らかに分かる品物だった。

「これをどこで？」

代表してダニスが聞く。

「とある冒険者の女性がおいて行った。あんた達みたいなやつに渡せよ」

「あの言葉はこのことだったのか？」

「言伝も頼まれてるぜ。『追いついてきてくれ』だとさ」

「はっはっはっ、こうなったら意地でも追いつかないとな、ダニス」

「そうだね。とっとと追いついて見返してやんないとあたしたち戦士の名折れだよ」

剣を手に取り眺めるダニス。それは惚れ惚れする輝きを放っている。

「それはダニスが持ちな。リーダーが良いものを持っていれば泊がつくってもんだ」

「じゃあ、レイピアはお前が持つのか？」

「まさか、レスティだろう、当然。こんな細っこい剣は俺には合わねえ」

「あたしが？ いいのかい？」

「それがいいよ、着けて見なよ。きっと似合うから」

デスティアが横から口を挟んでくる。他の面々もうなづいていた。

少し照れながらもレスティはレイピアを腰に装備する。それはまるでその為に用意されたかのようにレスティに映えていた。

「わしらにはないのかい？」

初老の魔法使いグルンが店主に尋ねる。

「あいにくそれだけだね。だがこれからも手に入れてくると言っていたから定期的に寄りな」

「そうか、それを楽しみにするでしょう」

「楽しみにしちゃだめだよ。私たちが手に入れるようにならないと、『追いついてきてくれ』って言われているんだから」

「そうじゃの。早く追いつかねばのう」

「そうですね。早く追いついて肩を並べて戦えるようになりましよう。あの方もそれを望んでいるのでしようから」

僧侶のワイルがそう締めくくった。

第14話 神の加護

魔法の加護の武器、防具。
神の加護の武器、防具。

それらは攻撃力や防御力を上げる効果だけではなく、多種様々な効果があった。

先日透が渡した武器は攻撃力が上がるだけのものであったが、杖であれば詠唱破棄の効果があったりと魔法の武器は簡単に語ることはできない。

しかし神の加護付きの武器、防具はその神の効果を有するため比較的説明しやすいと言える。

戦闘を司るラーフ神であれば攻撃力の増加させる効果。(STRの増加)

悪魔を司るベルフ神であれば体力の上昇効果。(CONの増加)

魔法を司るグルス神であれば魔法防御の効果。(魔法防御率の効果)

健康を司るビルマ神であれば体力の回復効果。(HP回復率の上昇)

精神を司るデント神であれば精神力の上昇効果。(WISの増加)

書物を司るシュリート神であれば魔法効果の上昇。(INTの増加)

音楽を司るフラリス神であれば精神力の回復効果。(MP回復率の上昇)

盗賊を司るリマリー神であれば回避力の上昇効果。(DEXの増

加)

これらが主な神々の効果である。

ゲームではそれらを駆使しているいろいろ狩りを行っていたわけだが、それらのほとんどはドロップ品であり地下墓地でも3階程度では手に入らないものだった。

透はそのことを知っているため翌日からは積極的にそれらの品々を集めることにした。とは言っても武器や防具にはレベル制限が設けられているためダニス達でも装備できるような下位レベル者向けの品々にする必要が有るため地下墓地の中層まで潜る必要がなく、上層部での戦いとなった。

透が潜ったのは地下16階。

ここでは地下6階と同じくレアドロップ品が出やすい。しかも低レベル者向けの神の加護付き武器や防具も出やすいと評判の場所でもあった。

朝目が覚めると透は朝食を済ませると早速、地下墓地へと向かう。

最短距離を走破し、敵との戦闘も避け地下16階へと降り立つ。

ここでの敵は主にワニ。巨大化したワニだ。普通の緑から脱色した白ワニ、血に染まったかのような赤ワニだった。

レアドロップ品としてはブロードソード、ロングソード、レイピア、ハンドアックス、ウッドスタッフ等々、防具も籠手や盾、ヘルメット等々、結構いろいろなものがある。そのうちほとんどが低レベルでも装備可能でそれぞれに魔法効果があったり神の加護があったりする。

さらにワニがドロップするワニの皮は防具へと加工することができ、低レベルでも着ることが可能な優秀な防具を提供することができるだろう。

あいにくとエルシアは完全に戦士として育てていたためそのスキルを持っていないが、ゲームでも防具屋に持っていけばプレイヤーが作るものよりも防御力が落ちるが加工してくれたので大丈夫だろうと考えていた。

鎧にせよ武器にせよ重さがあるため高レベルの武器や防具はとにかく重い。

ダニス達では透が着ているラビリンスメイルですら一人では持ち上げることができない重さだ。当然それでは動けないことになるため防御力はないに等しい。

しかしワニの皮を使った防具は軽いためそのような問題は発生しない。

だからこそ透はここでの狩りを選んだ。

やがてダニス達や他の冒険者のレベルが上がってくればさらに下層で狩りをして武器や防具を手に入れてくるつもりでもいるし、他のダンジョンなどへも出向くつもりだ。

だがとりあえずはここでの狩りを勤しむ。

干し肉をかじって腹を満たしつつワニを斬る。

誘いこんではウイングブレードで一気に切り裂く。

まだこのあたりでは一撃で屠ることができるので余裕の透だった。

今日の収穫は攻撃力増加効果のブロードソード、シュリート神のウッドスタッフ（魔法効果の上昇）、ライフ神の革籠手（攻撃力の増加）とワニの皮が25枚。

ワニの皮5枚で防具が一つ作れたはずなので、ちょうどいいはずと透は引き上げた。

武器屋に向かい昨日と同じく武器を渡す。

「ちゃんと渡しておいたぜ。信頼できるやつにな」

「そうですか、ありがとうございます」

「これも同じようにしてください」

「ああ、わかってる」

確認すると次は防具屋へと向かう。

「おや、スコープピオンスレイヤーの嬢ちゃんかい？」

「その名前は恥ずかしいのでやめてください。でもそのとおりですね」

「今日もサソリを倒してきたのかい？　うちではそんな品物は扱ってないが？」

「これを」

そう言って透はラーフ神の革籠手を渡す。

「これは……武器屋の旦那が言っていたような防具かい？」

「知っているなら話が早いですね。ええ、そうです。ラーフ神の加

護が付いています」

「なっ……………」

神の加護付きの防具。

神々の戦争の時に使われていたという代物で、今では現存しないと思われている代物でもあった。

「武器屋の旦那が言っていたように信頼できるやつに渡せばいいんだね？」

「はい、おねがいします」

「わかったよ」

「それとこれを」

そう言って透はワニの皮を取り出す。

「これをどうしよう？」

「これを使って防具を作ってもらえませんか？ 私にはできませんがあなたならできると思っているのですが？」

「確かにできるだろうが……………。今のあなたの防具より強い防具にはならないと思うがね……………まさか、これも？」

「ええ、そうです。早く追いついてきて欲しいですからね」

「あなたに追いつくには大変そうだ……………冒険者の連中にはある意味

では気の毒かもしれないね」

店主はため息を吐く。

「だが任せておけ、しっかりした防具を作って見せる」

「お願いしますよ。しばらくは手に入れますので」

「しばらくは？ どういうことだい？」

「しばらくしたら別のところで同じようなことをしようと考えています」

「そうかい、それはしかたがないねえ。あんたなら地下墓地の最下層まで行けると思っていたんだが、賭けに負けちまったかね」

「賭け、ですか？」

「ああ、工房連中といつまでに最下層に行けるか、とか、行けるかどうかという賭けをしていたんだ」

「ははっ、一人で地下60階は無理ですよ。だからこそ他の人にもランクを上げてもらうためにしているんですから」

「ろ、60階？ それが最下層なのかい？ そして行ったことがあるのかい？」

「行ったことがあるといえありませんし、行ったことがないといえませんがいいですね」

透はこの世界に来てから行ったことはない。しかしプレイヤーとしてエルシアで最下層に行ったことがある。上級者向けの狩場の一つでもあるからだ。

「あまり深くは聞かねえほうが良さそうだね」

透は肩をすくめてそれに答える。

「とりあえず、防具だけはお願いします」

「そして、信頼できる冒険者に、だね」

「はい。あ、あと僅かなお金でいいのでワニの皮の依頼をギルドに出してもらえませんか？ そうすれば依頼を達成ということでランクを上げることができますので」

「そのぐらいは構わねえが……どのぐらいのランクなんだか……」

「それこそ賭けにしたら面白んじゃないですか？」

「そうさせてもらうよ。ここにいる間でどのぐらいのランクが上がるのか面白そうだ」

「それじゃ、失礼します」

「あいよ、防具の作成に関しても渡すことに関しても任せておきな」

透はそれを確認すると宿屋へと向かった。

宿屋へ向かう途中、いろいろな店を覗いていったが、ゲーム名”

混沌の霸王”の混沌にふさわしいぐらい変な店が並んでいた。

ラーメンとケーキを同時に取り扱っている店、花束とパスタを取り扱っている店、果物と魚が交互に並べてある店等々。

ある意味で面白く、楽しくもあったので透は適当な店で食事を取ることにした。選んだのはハンバーグの店。ここもハンバーグ以外にイヤリングを扱っていた。

エルシアを見た店主はイヤリングも勧めてきたが、それを苦笑しつつ断り、ハンバーグだけを食すと透は宿屋へと帰った。

第15話 シュベル

予定していた1週間が過ぎ、それなりの加護付き武器防具、ワニの革鎧が出回り始めた。

地下3階で戦い始めるものも多く出始めて、地下4階へと進むものもそう時間がかからないだろうとされている。

地下3階の試練を乗り越えることが出来れば、地下6階までもすぐに行くことが出来るようになる。地下3階を超えられるかどうか地下墓地の特徴だった。

ちなみに次の試練とも言えるのは地下55階、この階から上級魔法を使ってくるモンスターが登場する。地下墓地では中級魔法を使ってくるモンスターがいないため、上級魔法を使ってくるモンスターが出始めるところまでは比較的安全なだった。とはいえ、そこまでたどり着くにはレベル60以上が必要となる。今の冒険者たちには遠い話でもあった。

そんな中、透はミールを離れシュベルへと向かうことにした。上手く武器屋と防具屋が依頼を出してしてくれたためエルシアとしてのランクは24となっていた。ミールを離れる際にはダニス達から「この武器を必ず使いこなし追いついて見せる」といって見送ってくれた。

シュベル。

シュベルは海に面した港街だ。

交易で栄えており、多種多様な品々が扱われる。ミールとは違った意味でしかも良い意味で混沌としている。多数の船が常に入出入りし、人々がごった返し、商品が飛び交う。

そしてシュベルには二つのダンジョンがある。

一つは海生生物が変異したモンスターが居るダンジョン。

正確には島というべきか。島の外側から内側へと道が繋がっており、島の中央へ近づくにつれモンスターのレベルが高くなっていく。

もう一つは悪魔が住み着いているダンジョン。

ここはかつて神々の戦争の際にベルフ神の配下だった悪魔が封印されている。

透が此処へ来たのは、やがて来るであろう中級者へ向けての武器や防具を集めるためだった。

透がまず向かうのは島の方だ。

漁師たちに話を聞いてみると、島付近は魚がよく取れるものの、モンスターの出現率が高く誰も近づかなくなっているとのことだった。

透が行きたい旨を伝えても色よい返事がもらえるわけもなく、逆に行かないように諭されるだけだった。

だがひとりだけ連れていってくれるという漁師がいた。

「本当にいいんだな？」

「ええ、2週間後に迎えに来てください。もしその時にいなければ死んだものと判断してもらって構いません」

「ランク24と、聞いたことのないようなとてつもない強さを持っているんだ、大丈夫な気もするが、わかった。そうさせてもらうよ」

ランク24になっていたのが効いたようだった。

透は2週間分の食料と水を用意すると船に乗り込むこととなった。

船は小ぶりではあったが頑丈な作りになっており対モンスター対策として舷側に逆落しのような感じのものが施されていた。

「帰りはもう少し大きい船出来てもらえるとありがたいですね」

透のその言葉に船乗り・ジヨハンと名乗った・は苦笑する。

「ほんとうに生きて帰ってくるつもりなんだな。いままであそこへ行って這々の体で帰ってきたものはいても、財宝とかを手に入れてきたものはいないぞ」

「多分、大丈夫でしょう。それよりも持ち帰ることができずに帰るはめになることのほうがもつたいないですよ」

「わかった、それなりの船を用意して迎えに行くことにするよ。死ぬんじゃねえぞ」

そんな会話がなされて透は島に降り立つこととなった。

島はゲームでは感じ取れなかった暑さがあった。

透は行ったことはないが、知識として知っている熱帯雨林のようだと感じた。

まずは宿営地の設置、と買い込んできたテントを張り食料や水を運び込む。

それらが終わるとまずは腕試しとしてボスモンスターのところへ向かう。

多分余裕で倒せるはずだが念のためソウルメイルを装備していく。

途中の雑魚は適当に倒しながら進んでいく。

ここのボスモンスターは巨大な魚だ。

しかも陸上で暴れまわっている不思議な魚だ。

透はボスモンスターを見つけると素早く近づき、麻痺スキルをかけアスカロンで切り裂く。

予想通り一撃では死なないが、ボスモンスターの麻痺が解ける前には倒すことができた。

レアドロップ品はなし……………。

まあ、そんなものか、と苦笑して倒している間に近寄ってきたモンスターを倒し、宿营地である砂浜へと戻った。

翌日から本番である。

シュベル沖合いの島の海生生物が変異した理由は今以て分かってはいない。

ただ周辺の海域をおびやかしていることだけ。

しかも一定の海域を離れるとまるで結界があるかのように全く出現しなくなる。

その変異生物たちは人しか襲わないため、島の周域は豊かな漁場となっていた。漁師たちは近づくの恐れながらも、襲われないギリギリのところを猟するのが常だった。

その境目を見極めることができるようになるかどうかによって、一人前の漁師かどうかを判断するのがシュベルの漁師の常だった。

主に中級者向けの狩場で中央にはボスモンスターもいる。

今の透でも一撃では倒せず、数回の攻撃をする必要があるほどのモンスターだった。普通ならランダムに設定されている属性もこのモンスターは固定されている種類で、ある意味で戦いやすい敵でもあった。

ボスだけのことはありレアドロップ率は高い。ただ惜しむらくは中級者向けの装備だということだろうか。

また中級者以上の武器や防具以外に、ここでは神の加護が付いたアクセサリ類が多数手に入る。もはやレアドロップという程でもないぐらいに。

ゲームとしては単純にダンジョンの一つでしかない。前述のとおりアクセサリ系のレアドロップを落とす場所であった。指輪やイヤリング、ネックレスなど。

それらの加護付きアイテムが手に入りやすいところでもあったため中級者以上の冒険者が集う場所でもあった。

アクセサリ装備は元々が何らかの効果を持っているが、加護付きはそれをさらに増加させるため便利な代物である。

中級者は経験値稼ぎも兼ねてちょうどいい場所でもあったので、地下墓地の後に来るのがこの場所でもあった。

その入口付近にはモンスターが出現しない場所があり、その同じぐらいのレベルの人とパーティを組む、そうして仲間を増やしていくのが常でもあった。

透が宿営地を選んだ場所もそこであった。

翌朝から透はレアアイテムを求めてモンスター狩りをする。

この島はそれほど広いわけでもないため、アイテムが一定量貯まったら宿営地へ戻り保管する。

毎日の最後にはボスモンスターを倒し、さらなるレアドロップを

狙う。

その繰り返しであった。

繰り返し作業は飽きてくるものでもあるが海に釣り竿をたらずと簡単に普通の海産物が手に入るので、結構楽しく過ごしていた。

モンスターの海生生物の種類が豊富な割に倒すとすぐに消えてしまったため食べることができないという欲求をそれで満たしていた。

1週間後にはそれなりの数のアクセサリ類が揃い、ボスモンスターとその周囲のモンスターだけを狙うことにした。

ボスモンスターは1時間ごとに現れるため、一日に何度も倒すことができる。

現れるまではその付近にいる雑魚モンスターを倒す。

それを3日も繰り返すとようやくボスモンスターからのレアドロップ品であるファルシオンを入手することができた。

透としては感無量な気持ちであった。

もう一本ぐらいはほしいと思いつつも結局、期限までに手に入れることはできなかった。

それでもアクセサリ系は合計で32個とかなりの数が集まっており、十分な数ともいえる。

後はテントを片付けて、漁師が迎えに来るのを待つばかりだった。

しかし漁師が訪れる気配はない。

釣りをして食料品も大丈夫だし、水が湧いている場所もあるから生活には困らないが、迎えが来ないことには集めたアイテムが無駄になる。

それ以前に帰る手段がない。

念のため筏でも作るべきか否か。
そんなことが透の頭の中をよぎる。

作ったことはないが、丸太をつなぎあわせることぐらいならでき
る。

その状態で剣を櫂替わりにして、境界線まで辿り着けば漁師に出
会うこともできるだろう。

そう考えた透は、行動に移す。

宿营地近くの木を剣で切り裂き、蔓を引っ張ってそれで巻きつけ
ていく。

STR201は伊達じゃない。

幾本もの丸太を軽々と持ち上げ浜場へと運び、蔓を根元から引っ
こ抜く。

ある程度の本数がたまると、それらをきつく縛り上げていく。
その日はそれだけで一日が終わった。

次は帆だ。

櫂だけでは動力としては大したことがない。やはり帆の必要性が
ある。

帆布ではないがテントが利用出来るだろう。

筏の中央付近に一本の柱を立て、そこから横に柱をつける。

その間に帆を張り、三角帆の完成となる。

この作業には難航しこれだけで一日を費やすこととなった。

見た目も悪いし、どこまで効果があるかはわからないが、とりあ
えずは大丈夫だろう。

剣だけで作業したとは思えないような出来である。

それでも完成には違いない。

よつこらせ、と透は筏を持ち上げて海に浮かべる。
そして積荷を船に積み込んでいく。

風は幸い島方向から吹いている。

上手く行けばすぐにでも境界線へとたどり着くことだろう。

しかしそうはうまくいかないのが透の運の悪さかも知れない。
ボスモンスターが襲いかかってきたのだ。

足場は不安定。

しかもモンスターは海の中から飛び上がって襲いかかってくる。

上手く麻痺させれば倒すのも容易だと思われるが、足場にとらわれて思うようにいかない。

何度も繰り返すうちに、筏の端の方が崩れ始める。

それでも少しずつダメージを与えることによりなんとか倒すことには成功した。

レアドロップ品ファルシオンを残して。

運がいいのか悪いのか、正直なんとも言えない透だった。

やがて境界線近くにたどり着くと漁師たちが漁をしているのに遭遇した。

それに便乗させてもらうこととしなんとかシュベルへと帰還を果たす透だった。

話を聞くとあのボスモンスターが出没し始めて、かなり漁がしにくくなっているとか。

「……………」

透は自分が倒しすぎたかも知れないことを思うと、笑うことはできなかった。

おそらく1時間という出現は海から陸上へと移動するまでの時間だったのかも知れない。

ゲームでは単純に1時間ごとの出現でしかなかったが、現実として捉えればそういうことなのだろう。

悪いことをした……、そう透は思う。

送ってくれた漁師のジョハンも帰りの際に襲われて今も療養中とのことだった。

シュベルに戻ったら見舞いと謝罪が必要だろう。

そんなことを考えながらシュベルへの途につくのだった。

シュベルへと帰還した透が最初に向かったのはギルド。

どんな依頼が出ているのかを確認するためだ。

お金自体はどうでもいいがランクを上げるためには依頼をこなすしかない。

ギルドに入り依頼を見ると、加護付きの武器や防具を求め、という依頼が多数見て取れた。

しかも依頼主は冒険者だった。

かなりの金額で依頼が貼られている。

すでにシュベルにもミールでの話が伝わっているのだろう。

冒険者たちは大金を払ってもそのような武防具を手に入れたがつているようだった。

透はそれらの依頼を手に入れたアクセサリ類で一気にこなしていく。

それにより透は一気にランク56へと上がることとなった。

手に入れた武器ファルシオンは武器屋に下ろすつもりだ。以前と同じように。

しかしそれは武器屋に入った時点で止められることとなった。スミートの騎士団がちょうど訪れていたためだ。

透が出したファルシオンに目を奪われた騎士たちは、それを見るとぜひ譲ってくれ、いくらでもだすから、と懇願してきた。

それに透は答えた。

「あなた方にこれを使いこなすことができるのならば譲ってもかまいませんよ」

と。

「もちろん使いこなして見せる」

しかしやはり中レベル武器であるファルシオンは平騎士には使いこなすことができなかった。持つことすらおぼつかない騎士たちは悔しさに溢れていた。

「騎士団長ならあるいは使いこなせるかも知れない。呼んでくるか

ら待っていてくれ」

そう言うと騎士のひとりは返事もまたずに勢い良く外へと出て行った。

その様子を見ていた店主は透に話しかけてきた。

「ミールでの話は聞いているよ。信頼できるものに渡せばいいんだろっ？」

「話が早くて助かります。騎士団長なら信頼できますか？」

残った騎士たちの目がきつくなるのを気にせず透は答えた。

「ああ、人柄も良く使いこなせるなら、今、シュベルにいる中で一番信頼が出来る人物だと思うよ」

「なら、後は使いこなせるか、だけですな」

やがてドタドタとした音と共に一回り大きな騎士がやってきた。

「こんにちは、いや、こんばんは、かな？」

「こんばんは、でしょうか」

「早速で悪いが私にしか使えない剣があると聞いてやってきたのだが、見せてもらえるかな？」

「こちらですよ、騎士団長殿。そちらにいる冒険者のエルシアさんが持ち込んだものです」

騎士団長は透の方を向くと礼をして、剣を見つめる。

「これは……。試しに振ってみてもいいか？」

「裏に試す場がありますので、そこでどうぞ」

店主が案内が裏を指し示す。

「わかった、試させてもらおう」

そう言って騎士団長は移動していく。

透や店長、騎士たちも付き従って裏庭へと向かう。

まずは横に置かれた木に対する袈裟切り。

一刀のもとに斬れる。

「驚いた、これほどのものとは」

透も驚いていた。まさか使いこなせるレベルの人がいるとは思っていなかったからだ。

あとで知るのだが騎士団員のほとんどは冒険者登録をしておらず、冒険者としてのランクでは11が最高峰なのだったが騎士たちではそれを上回るものがあるのだった。

「これは幾らだ、言い値で買おう」

そう騎士団長は店主に告げる。

「いえ、それは今日そちらの冒険者さんから持ち込まれたものです

ので値段交渉はそちらとしていただいたほうがいいですね」

「そちらの女性が手に入れたのか……。驚いた冒険者でここまでの武器を手に入れるとは聞いたことがない。先程も言ったように良い値で買おう、幾らだ」

「値段は特に設定していません。出来ればその力を民衆のために、そして冒険者達の支援をお願いしたい」

「民衆のために使うのはわかるが、冒険者たちというのがわからんな」

「今のところ私と肩を並べる冒険者がいません。演習と称して冒険者達とともにダンジョンなどに潜れば冒険者たちも育つことでしょう」

「たしかにそれは一理あるな。だが国の守りはどうなる」

「私が色々と品物を仕入れ、少数精鋭の部隊を作り上げることができるようになれば問題ないではありませんか？」

「最近、加護付きの武器やアクセサリが出まわると思ったら君だったのか……」

「噂になってましたか？」

「ああ、十分すぎるほどにな。そういう事であれば平騎士たちの訓練と称して冒険者たちと組ませるのはいい経験かも知れないな。最初から騎士として育ったものは野宮とかに慣れていないものもいるからな」

「ええ、お願いします」

「いや、逆にお願いしたいところだ。ところで君は王家に仕官するつもりはないか？ 君ほどの腕なら十分に騎士団長クラスになれるとおもっただが」

「それはやめておきます。今のところは加護付きの武器防具を広めることで精一杯ですよ」

「優先的にこちらに回してもらおうということは可能か？」

「依頼としてであれば多少は融通もききますが、民衆に直結するのは冒険者ですので個人としては冒険者を優先的に渡したいですね。治安の問題もありますので最上級のものは騎士団に卸してもそれ以外は冒険者に頑張ってもらおうと思います。目指す先がかなり遠いものですから」

「それは何か聞いてもいいかな？」

「神域、もしくは地獄門の最下層ですね」

「神域！？ 地獄門！？ そんなところに人が辿りつけるのか？」

「たどり着かなければならないんですよ。私にとっては。一人では無理でも複数人であれば可能だと考えています。ただし先程のように肩を並べるぐらいのランクがなければ無理な話ですけどね」

「そうか、遥な高みを君は目指しているのだな」

苦笑で透は答える。

「ところで、話は戻すがこの剣は私が貰っても構わないのか？」

「ええ、十分に使えているようですから構いません。簡単に手に入るものでもありませんので大事に使ってもらえるとありがたいですね」

「もちろんだとも」

「もう一本は武器屋に預けておきます。使いこなせるような人がいたら渡してあげてください」

そういって透は武器屋を後にして、宿屋へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5293q/>

混沌の霸王

2011年2月13日08時30分発行